

# 阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.106  
2008

10 月号

## トピックス

大阪大学・東北大学合同フォーラムをサンフランシスコで開催  
大学院学位記授与式挙行

クローズアップ

外国語学部

—EX ORIENTE LUX ET PAX (光と平和は東方より)—



大阪大学広報誌

## 目 次

|                 |    |
|-----------------|----|
| トピックス .....     | 2  |
| クローズアップ .....   | 4  |
| 役員室だより .....    | 8  |
| ナウスPECIAL ..... | 18 |
| キャンパスニュース ..... | 20 |
| 表 彰 等 .....     | 36 |
| 人 事 .....       | 42 |
| 訃 報 .....       | 44 |
| インフォメーション ..... | 45 |
| ガイドマップ .....    | 51 |
| 海外拠点だより .....   | 52 |
| 交流協定大学 .....    | 54 |
| クラブ&サークル .....  | 55 |
| トピックス .....     | 56 |



表紙写真：木司令（もくしらい）

懐徳堂で使用されていた柶<sup>ひょうしき</sup>。開講を告げる合図として用いられていました。表面には「木司令」の3文字が、裏面には「一令にて寤れ、再令にて醒<sup>さる</sup>よ、三令にて聚まれ」云々という文が、いずれも中井蕉園の字で刻されています。

（総合学術博物館待兼山修学館「大阪大学の系譜」ゾーンの「懐徳堂」コーナーに展示）

表紙デザイン：株式会社ココティエ

## 大阪大学・東北大学合同



## 大学院学位記授与式挙行



## フォーラムをサンフランシスコで開催

9月18日(木)、本学サンフランシスコ教育研究センターと東北大学米国代表事務所とが合同企画した「大阪大学・東北大学合同フォーラム - Joint Forum on Innovative Research and Philosophy of Science (革新的研究と科学哲学)」がサンフランシスコ市内中心部にあるパレスホテル(The Palace Hotel San Francisco)にて、本学から鷲田清一総長と武田佐知子および辻 毅一郎両理事・副学長、東北大学からは植木俊哉理事を迎え、開催されました。

両大学の首脳基調講演でフォーラムは幕を明け、本学工学研究科の河田 聡、石黒 浩両教授、東北大学の大見忠弘名誉教授および宮崎照宣教授が両大学の誇る研究プロジェクトの紹介を行い、両大学の21世紀における取り組みについて発表を行いました。

4件の最先端研究に対し、大阪大学の歴史とネットワークの重要性を説明した上で新研究領域の創出に向けた融合研究とその背後にある「科学の考え方(哲学)」を説く鷲田総長の講演は、総合的で分かりやすく文理間のバランスを取る感動的なものと好評でした。フォーラムにはおよそ180名の参加があり、米国西海岸にて両大学のプレゼンスを示すという目的



的を達成する結果となりました。

フォーラム前日には、在サンフランシスコ日本総領事館である長嶺安政総領事の主催する日米交流会に出席し、カリフォルニア大学デイビス校ウィリアム・レイシー副学長らとの懇談を持ち、フォーラムの翌日19日(金)にはスタンフォード大学とカリフォルニア大学パークレー校へ鷲田総長、武田ならびに辻両理事・副学長が表敬訪問しました。大阪大学とスタンフォード大学ならびにカリフォルニア大学パークレー校との今後のより密接な交流が期待されます。

9月25日(木)、コンベンションセンターMOホールにて、大学院学位記授与式が行われました。

修了者は237名(修士36名、課程博士152名及び論文博士49名)を数え、修士及び博士の受領代表者19名が鷲田清一総長から学位記を授与されました。

列席した受領者は、総長からの式辞で「社会のいかなる困難な問題もみずからの問題として受けとめるそのような視界のなかに、みずからの専門研究をおいていただきたい。そして『大阪大学の大学院を修了した学生は一味違う』と言ってもらえるような研究者もしくは企業人になってほしい」と激励を受けました。



総長式辞 32～33ページに掲載

# 外国語学部

- EX ORIENTE LUX ET PAX (光と平和は東方より) -

外国語学部長 杉本孝司

外国語学部の起源は、大正10年(1921年)に大阪の実業家・林蝶子女史(1873 - 1945)が「大阪に国際人を育てる学校を」という理念のもとに、学校設置資金として私財100万円を国に寄付したことに遡ります。政府は、この寄付金を基に同年大阪外国語学校を大阪市天王寺区上本町8丁目の地に創設しました。その後、昭和19年(1944年)4月に大阪外事専門学校と改称され、昭和24年(1949年)の国立学校設置法施行により大阪外国語大学が発足しました。大阪外国語大学は国立大学で二つしかない外国語大学

の一つとして発展し、昭和54年(1979年)には現在の箕面の地にキャンパスが移りました。大学発足当初は12の語学科から出発しましたが、我が国における言語教育・研究の一大拠点として規模は拡大され、専攻言語の数は25にまで拡大しました。そして平成19年(2007年)の大阪大学との統合に伴い、大阪大学の新たな組織として日本語を含む25言語の専攻を有する国立の総合大学で唯一の外国語学部となりました。

## 専攻

- 中国語専攻
- 朝鮮語専攻
- モンゴル語専攻
- インドネシア語専攻
- フィリピン語専攻
- タイ語専攻
- ベトナム語専攻
- ビルマ語専攻
- ヒンディー語専攻
- ウルドゥー語専攻
- アラビア語専攻
- ペルシア語専攻
- トルコ語専攻
- スワヒリ語専攻
- ロシア語専攻
- ハンガリー語専攻
- デンマーク語専攻
- スウェーデン語専攻
- ドイツ語専攻
- 英語専攻
- フランス語専攻
- イタリア語専攻
- スペイン語専攻
- ポルトガル語専攻
- 日本語専攻

## ■ 外国語学部の特色

外国語学部は、25に及ぶ世界の諸言語の専攻語教育課程を設け、世界の言語と言語を基底とする地域文化の教育研究の集積拠点として、幅広く、そして深く世界・文化・地域を学ぶことができます。そして、大阪大学のなかで外国語学部は、次の二つの機能を果たします。第一に、複数の言語に関する高度な言語運用能力を基に、世界各地域の多様な文化に関する総合的かつ専門的な知識を身につけ、異文化が複雑に交錯しあう国内外のさまざまな分野と場面において、相互理解と諸課題の解

決に貢献する「幅広い職業人」を養成します。第二に、働く分野に関わらず、今日の国際社会に生きる社会人にとって不可欠な「世界の言語と文化に関する総合的教養教育」を提供します。



箕面キャンパス



箕面キャンパス

SCHOOL OF FOREIGN STUDIES

言葉を究めて世界へはばたく

■ カリキュラムの特色

外国語学部のカリキュラム体系は、大きく〔共通教育系科目〕と〔専門教育系科目〕に区分されます。阪大11学部の中でもユニークな所は、専門教育が1年次からフルに開始されることです。外国語学部に入学者の中には、専攻語が母語として話される国や地域で数年以上過ごした経験を持つ人もいます。しかしその大半は英語を除けば専攻語は人生で初めて学ぶ外国語です。初めは文字さえ判読不可能な専攻語も



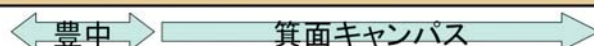
外国語学部豊中教務分室



箕面キャンパス

あるでしょう。まさに異文化の世界を入学当初から経験するわけです。4年間の勉学においてこのような外国語を、その文化の深みと広がりまでも含めて学ぶためには、1年次より集中的かつ体系的に言葉を学んでいく必要があります。こうして4年間みっちり学習することによって、「言葉を究めて世界へはばたく」学部生が巣だっています。外国語学部生の1年次に配当される授業は原則として豊中キャンパスで実施され、2年次以降に配当される授業は、箕面キャンパスで実施されます。

|                             | 1年次                         | 2年次               | 3年次           | 4年次  |
|-----------------------------|-----------------------------|-------------------|---------------|------|
| 共通教育                        | 共通教育・基礎セミナー                 |                   |               |      |
|                             |                             | 情報処理教育, 健康・スポーツ教育 |               |      |
|                             | 英語(初・中級)                    |                   |               |      |
| 専門教育                        |                             | 英語(中・上級)          |               |      |
|                             | 専攻語                         |                   |               |      |
|                             | 講義・演習科目(前期課程)               |                   | 講義・演習科目(後期課程) |      |
|                             | 特設科目, 研究外国語, 兼修語学(初級・中級・上級) |                   |               |      |
|                             |                             |                   |               | 卒業論文 |
| 教職教育, 国際交流, コミュニケーションデザイン科目 |                             |                   |               |      |



教育システムの第一の特色は一貫した語学教育。専攻語は25言語。選択可能な研究外国語を含めると約60言語が開設されています。

第二は、言語・文化など専攻分野の教育が語学実習・演習と並行して行われること。3・4年次になると、すでに習得した語学力を生かして専攻分野の研究に力を注ぐことになります。

### Let Language Be Your Wings To The World

「デンマーク語専攻には、生きたデンマークを学ぶのに最適な環境が整っています。小さな好奇心からデンマークというマイナーな国を選んだ私ですが、勉強するにつれて他人とは違った視野が広がり、デンマークに対する興味や探究心は広がるばかりです。」  
(3年 野々山貴美子)



「私がこの専攻を選んで良かったと思うのは、言語や文化の魅力からだけではない。新歓旅行やネイティブの先生のお宅でのカレーパーティー、夏祭りでのラッシー（パキスタンでよく飲まれているヨーグルト飲料）作り、ウルドゥー語劇などの行事を通して、本当に多くのものを得ることができるのも、この専攻の魅力だ。」  
(2年 岩井まどか)

#### 学生たちと授業

外国語学部の専攻語教育は一年次からの少人数教育です。専攻語実習のクラスサイズは平均で15名、多くて20名前後です。少人数ということは学生と教員が緊張感を持って効率的に学習できることを意味します。もちろん学生に求められることも多くありますが、その分やればやる程、充実した成果が期待できます。「学問に王道なし」は語学の場合も例外ではありません。4年間の苦しい試練を乗り越えていく学生たちの「現場からの声」が外国語学部の姿をもっと生々しく伝えてくれるでしょう。

「日々の学習の中で、記号にしが見えなかったハングルが自分の中で意味を持ち始め、日本語との類似点に胸を躍らせる一方、あまり類似点が多いが故に犯してしまう間違いから日朝両言語の奥深さを感じる。そうするうちに、私のような理由で入学した人もそうでない人も、みんなすっかり朝鮮語のとりこになっていくのです。」(4年 手操 蘭)



「ロシア語はとても難しい言語ですが、少しでもロシアに興味や関心を持てれば授業も楽しくやりがいのあるものになると思います。それに自分のロシア語習熟度に応じたレベル別の授業もあるので、自分のニーズにあったロシア語教育を受けることができます。また先生方も親身になって指導してくださるので、学習環境も大変素晴らしいと思います。」  
(3年 野口健太)



「授業はハード、暗唱の順番が回ってくる時には胃がギリギリ・・・、しかしそれを乗り越えれば、中国の文学・政治・歴史・経済や中国社会が抱える深刻な問題、さらには広東語や古代漢語まで、身につけた中国語を道具にして、私たちが学べることは無限に広がっています。さまざまな角度から中国を知ることができる、そんな環境が外国語学部にはあると思います。そして厳しくも楽しい授業を共にし、個性的で魅力的な仲間がたくさん出会える場所です！」  
(4年 半田紘子)



箕面キャンパス中庭大時計

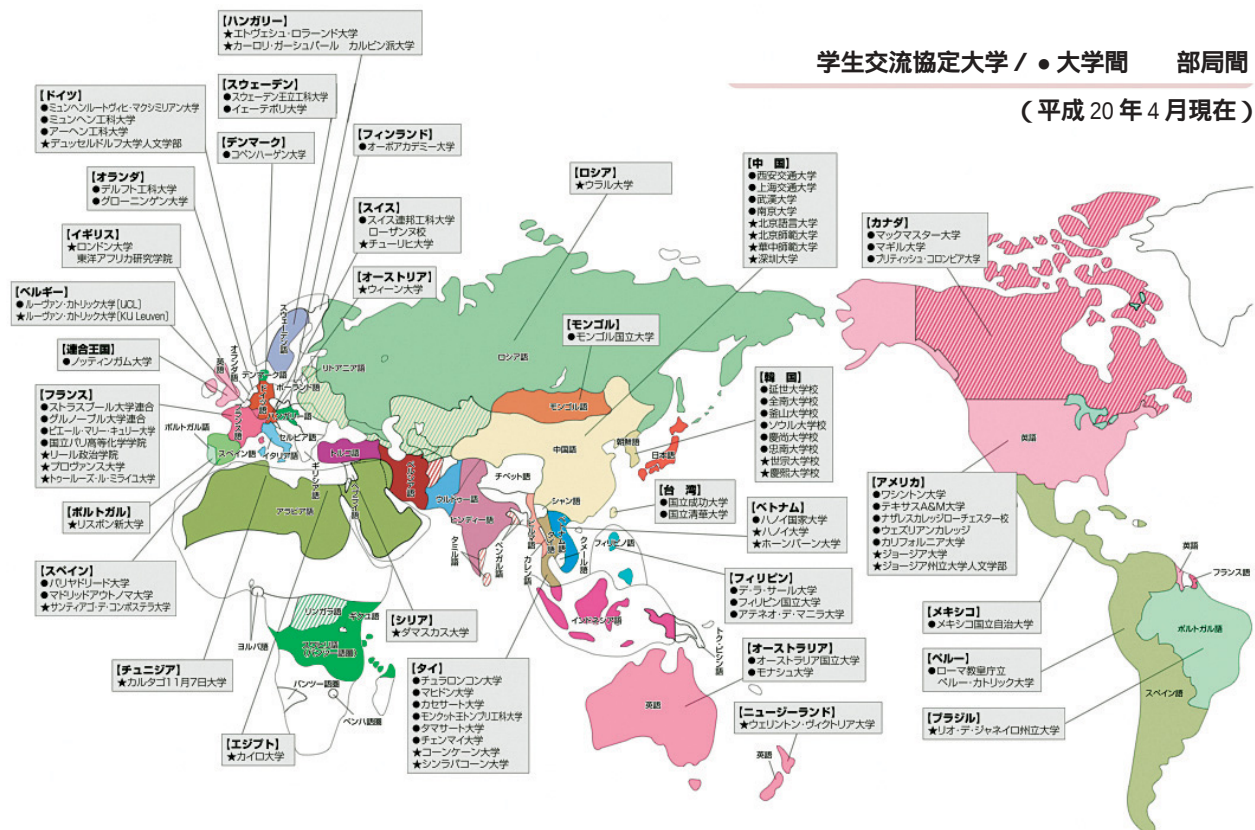
SCHOOL OF FOREIGN STUDIES

言語を通して文化を学び文化を通して言語を学ぶ  
Culture Through Language, and Language Through Culture

■ 海外留学

数多くの外国語学部生が在学中に海外留学を経験します。大阪大学の交換留学制度を利用する学生、日本政府や外国政府または政府機関、民間団体などが募集するものを利用する学生、自己負担の私費留学、とその手段は様々ですが、毎年200名を下らない学生が何らかの形で海外留学をしています。外国語学部生をこのように海外に駆り立てるものは何でしょうか。それはやはり専攻語を通して学ぶ文化や社会に直接接してみたい、その国の人とふれ合いたい、より深く知りたい、文化を肌で感じたい、など語学を専門的に学ぶものの中に自然と湧きあがる憧憬と衝動が強く働くからではないでしょうか。「素手でパンにさわって買わずにもし

した光景に驚いてしまったハンガリー」「ケニアの孤児院で私を迎えてくれた子供達の素敵な笑顔」「長く寒い夜をより快適に暮らすスウェーデン人の様々な知恵」「イタリア人には結構シャイな人が多かった」「喜怒哀楽が激しく、ストレートな感情表現で、怒ったと思えば次の瞬間にはもう笑ってるベトナムの人々」「日本から来たと言うとどこでもみんな「写真」「写真」と言ってしまうに記念撮影をすすめてくれるフィリピンの人たち」「初めての北京で感じた、運転手の超激しい運転による軽い生命の危機感」「インドの教室で、明日から旅行に行くのでしばらく授業はありませんとさっさと出て行った先生」「大音量でどこからか聞こえてくるアラブポップスと車のクラクションの洪水の町カイロ」等々、外国語学部生の貴重な体験談や経験は枚挙にいとまなしです。



杉本孝司 すぎもと・たかし

プロフィール

1973年大阪外国語大学大学院外国語学専攻修士課程修了(文学博士)。1982年ハワイ大学大学院言語学科博士課程修了(Ph.D., 言語学)。大阪外国語大学外国語学部教授、副学長などを経て、現在、言語文化研究科教授、外国語学部長。専門は理論言語学、英語学。

# 役員室だより

2008.10 Vol.26

## 大学の動き

### 第2回経営協議会を開催

9月29日(月)に、今年度の第2回経営協議会を中之島センターで開きました。学外委員11名、学内委員14名が出席し、活発な意見が交わされました。これまでの経営協議会では、主に法令で定められた事項、大学運営上の重要事項の審議や報告を、大学側からの説明を中心に進めていましたが、学外委員からの意見、要望をきくための時間も十分にとることとしました。今回は、本学の「グランドプラン」「産学連携活動」「人材育成」をテーマに設定して1時間余り意見交換を行いました。

### 事務改革の取組み状況

事務改革については、「教育・研究・社会貢献の活動の格段のレベルアップを可能とする事務組織と業務手法の確立、及び重要施策に投入しうる人的・財務的余力の創出」をビジョンとして掲げているところです。そのビジョンを達成するため、事務改革策定ワーキングを9月に立ち上げ、事務処理業務の効率化を目指した具体的方策（業務の標準化・集約化、IT化による業務改善等）の検討を開始しました。事務改革策定ワーキングのメンバーは、木下タロウ総長補佐をヘッドとし、竹村治雄教授（サイバーメディアセンター長）、長岡 亨 特任教授・江原康生講師（情報基盤推進本部）、情報推進部員（2名）、事務改善推進室員（2名）及び業務別チームにより構成しました。業務別チームメンバーについては、事務改革に熱意を持っている中堅、若手の事務職員を対象として全学的に募集を行った結果、総勢56名から応募がありました。個別面談等を行い、すべての方から事務改革への熱意を感じましたので、全員をメンバーに選出させていただきました。各業務別チームは、人事系（14名）、財務系（21名）、研推・産連系（5名）、教務系（9名）、施設系（7名）の編成となりました。その内、女性は7名です。

## 各室の検討状況

### 総合計画室

#### 第二期中期目標・中期計画の検討状況

9月末に文部科学省から、第二期中期目標・中期計画の作成に関する通知がありました。7月に原案が各大学に示され、意見照会されていましたが、修正後の最終的なものとなります。第一期のものとの変更点は概ね次のとおりです。

- ・項目数を原則として100項目以下としたこと。
- ・「国際化に関する目標」「法令遵守に関する目標」が新設されたこと。
- ・附置研究所は中期目標の記載事項から外れ、新たに、共同利用・共同研究拠点となる組織が中期目標の記載事項となったこと。
- ・記述等に関して全体的に大学の自由裁量の余地が増えたこと。

次期中期目標・中期計画検討ワーキングでは、平成22年度から始まる第二期中期目標・中期計画の具体的な検討作業を、下記のサブワーキングで9月から始めました。12月中に原案を作成し、各部局、各室と摺り合わせをしながらまとめていきます。(来年6月末に文部科学省に提出)

今回の作業では、全体の計画項目数も100以下とし、内容もできるだけコンパクトで業務の負荷が少なくなるような設計を念頭に置いて検討を進めています。

## 教育サブワーキング委員

| 氏 名     | 室 名    | 部 局 名              |
|---------|--------|--------------------|
| 小 林 傳 司 | 教育・情報室 | コミュニケーションデザイン・センター |
| 滝 澤 温 彦 | 総合計画室  | 理学研究科              |
| 川 端 亮   | 評価室    | 人間科学研究科            |

## 研究・社会連携サブワーキング

| 氏 名     | 室 名       | 部 局 名     |
|---------|-----------|-----------|
| 原 島 俊   | 研究・産学連携室  | 工学研究科     |
| 井 上 克 郎 | 総合計画室     | 情報科学研究科   |
| 山 中 伸 介 | 評価室       | 工学研究科     |
| 野 村 美 明 | 広報・社会学連携室 | 国際公共政策研究科 |
| 高 田 健 治 | 国際交流室     | 歯学研究科     |

## 業務運営・病院サブワーキング

| 氏 名     | 室 名   | 部 局 名   |
|---------|-------|---------|
| 三 成 賢 次 | 総合計画室 | 法学研究科   |
| 堀 井 俊 宏 | 総合計画室 | 微生物病研究所 |
| 村 上 伸 也 | 評価室   | 歯学研究科   |
| 吉 川 秀 樹 | 財務室   | 医学系研究科  |
| 岡 村 康 行 | 人事労務室 | 基礎工学研究科 |

## 『大阪大学環境報告書2008』の公表

「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律」(環境配慮促進法)に基づき、本学における2007年度の環境パフォーマンスデータや環境保全活動を紹介する『大阪大学環境報告書2008』を作成し、公表しました。

本報告書は大学ホームページに掲載しており、「法人情報の公表」ページからアクセスできます。

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/information/joho/pdf/report08.pdf>



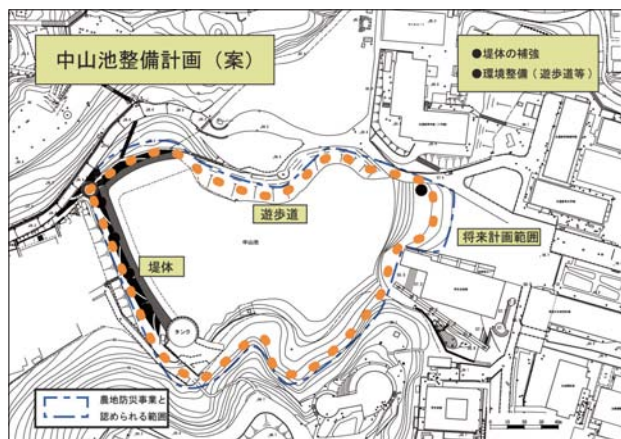
## 中山池整備

本学が所有する中山池の堤体補強による防災整備及びその周辺の環境整備を国及び大阪府の補助金等並びに大阪大学の一部負担で行います。

この整備については平成 20 年度設計、平成 21 ~ 22 年度に防災、周辺環境整備を行う予定です。

本事業は、防災整備と併せて、大阪大学キャンパスマスタープランに基づいた水辺空間を整備するものであり、地域と大学が相互に浸透するコミュニティキャンパスの形成の一環、キャンパスエッジにおける整備として、地域と大学が住環境像を共有するモデルプロジェクトを展開するものです。

整備方針は、中山池周辺を親水空間とするが、安全面に配慮し、歩行者動線の利便性・快適性を向上させる整備として考えています。



整備計画（案）

## 教育・情報室

### 「大学院教育改革支援プログラム（大学院 GP）」の採択

文部科学省の平成 20 年度「大学院教育改革支援プログラム（大学院 GP）」の審査結果が発表され、大阪大学からは以下の 4 件が採択されました。

| 申請部局                      | 事業名称                 | 取組実施担当者(代表者) |
|---------------------------|----------------------|--------------|
| 理学研究科（数学専攻）               | 数物から社会に発信・発進する人材の育成  | 大 鹿 健 一      |
| 工学研究科（生命先端工学専攻）           | 国際連携大学院FDネットワークプログラム | 金 谷 茂 則      |
| 歯学研究科（分子病態口腔科学専攻）         | 先端科学から未来医療を創る人財の育成   | 恵比須 繁 之      |
| 経済学研究科（経営学系専攻）（近畿大学と共同申請） | イノベーションリーダー養成プログラム   | 金 井 一 頼      |

全国では、273 件の申請の中から 66 件の事業が採択されました。1 大学からの申請は 3 件まで（他大学と連携する場合は 4 件まで）認められましたが、大阪大学から申請した 4 件すべてが採択されました。これは全国で最多の採択件数です。

昨年度の「大学院教育改革支援プログラム」でも、17 の大学が 1 大学の申請限度である 6 件を申請する中、大阪大学と東北大学だけが 6 件すべてについて採択されました。大阪大学の申請は、これまで全件が採択されたこととなります。

また、同プログラムの前身である「魅力ある大学院教育」イニシアティブにおいても、大阪大学からは平成 17 年度に 10 件、18 年度に 3 件の事業が採択されており、これらも全国で最多です。

このような結果は、大阪大学の各部局が大学院教育の改革のために活発な取組みを行い、大学院教育の実質化に努めていただいていることの反映であると考えます。

### 「質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」の採択

学部レベルの教育改革を支援する「質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」は、昨年度までの「現代 GP」と「特色 GP」が一つにまとめられたプログラムです。大阪大学からは 4 件申請し、以下の 2 件が採択されました。

| 申請部局  | 事業名称                 | 取組担当者   |
|-------|----------------------|---------|
| 理学研究科 | 知的能動性をはぐくむ理学教育プログラム  | 篠 原 厚   |
| 薬学研究科 | 食と環境の安全安心を担う薬学人材養成教育 | 小 林 資 正 |

全国では合計 939 件の申請があり、148 件の事業が採択されました。3 件採択された大学が 2 校、2 件採択が 21 校でした。

## ファカルティー・ディベロップメント（FD）研修の開催

9月9日(火)に豊中キャンパス、9月19日(金)に吹田キャンパスで、今年度の全学ファカルティー・ディベロップメント（FD）研修を実施しました。全日にわたって、共通教育賞受賞者の授業の紹介、他大学でのFD取組事例についての説明、教育・情報室長と室員による講演、またキャンパスライフ、メンタルヘルス、授業支援システムについての情報提供が行われました。今年度から、教授から助教まですべての教員が全学FD研修の対象となり、2日間の合計で341名の参加がありました。本年は大学によるFDを義務化する法令改正がありましたが、そもそもFDを通じて教員が教育について考え、学び、より良い教育を実現していくことは大学としてたいへん重要な課題です。来年度に向けて研修内容の一層の充実を図りますので、ご協力をお願いします。また、部局ごとにFD活動を進めることも必要です。FDをミッションの一つとする大学教育実践センターでも、シンポジウムなどをたびたび開催していますのでご参加ください。



## 学生のためのスペースの整備

大阪大学では、学生のコミュニケーションや主体的学習のためのスペースの整備に努めています。現在改修工事中の附属図書館豊中本館および吹田分館には、情報環境を整備し学生の主体的活動やグループでの学習を支援するための、「ラーニング・コモンズ」と呼ばれる広く充実したスペースを作る計画です。日本の大学図書館では、あまり例のない先進的なものになります。また豊中キャンパスの大学教育実践センター自然科学棟の一階を、学生のコミュニケーションの場として整備するため、教育・情報室のもとに「実践センタースペース利用検討ワーキング」を設けて検討しています。

なお自然科学棟一階を、暫定的にオープンスペースとするための工事を完了しました。附属図書館豊中本館下の食堂が、改修工事のため2009年3月(予定)まで閉鎖されますので、その代替として利用が可能になりました。

## 大学説明会（オープンキャンパス）の実施

7月26日から8月19日にかけて、大学説明会を学部ごとに実施し、高校生、父兄、高校教員、受験関係者などを迎えて、各学部の紹介、施設の公開、模擬授業などを行いました。本年は全国からきわめて多数の参加があり、合計で16,681人に上りました。昨年は13,587人でしたので22.8%の増加になります。



# 研究・産学連携室

## 平成 21 年度グローバル COE プログラムの申請

研究・産学連携室では、平成 21 年度グローバル COE プログラムの申請に向け、各部局からの提案及び室の下に置かれた各ワーキンググループからの提案をもとに、10 月から提案内容の事前検討を進めるなど、採択を目指した取り組みを行っていくこととしています。

## 平成 21 年度科学研究費補助金説明会の開催

本学では、毎年 9 月から 10 月にかけて、吹田及び豊中の両地区において科学研究費補助金説明会を開催してきましたが、今年度からは、新たに箕面地区においても説明会を開催し、それぞれの地区で日本学術振興会学術システム研究センターの研究者である本学教員から講演をいただき、多数の研究者の方々から応募いただくことを目指しています。

なお、同説明会では、「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」に基づく競争的資金等の不正使用防止についての説明を併せて行うことで、本学教職員の不正使用防止への取り組みに係る理解増進と問題意識の向上を図っています。

## 競争的資金等の使用に関する行動規範及び競争的資金等不正防止計画

本学では、研究等を遂行する上での行動の基準となる行動規範及び研究費の適正な運営・管理を行うための不正防止計画をそれぞれ定め、9 月 16 日の部局長会議で了承を得て同日付けで制定されました。

本学教職員の皆様におかれましては、これらに基づき競争的資金等の不正使用防止に取り組んでいただきますようよろしくお願いいたします。

## Science 論文セミナーの開催

「質の高い論文作成を目指して」と題したセミナーが、9 月 8 日(月)に大阪大学コンベンションセンターの MO ホールで、大阪大学とサイエンス日本事務局の主催で開催されました。

このセミナーは、Science 誌編集長クラスによる日本における初めての広報活動の一つとして企画されたものであり、東京、神戸に続き大阪でも開催されました。東京、神戸では、副編集長の Katrina Kelner 博士の講演のみでしたが、本学ではこれに加え研究・産学連携室員である生命機能研究科の米田悦啓教授にも講演いただきました。

当日は、大学内外から総勢 320 名以上の参加があり、研究・産学連携室長の西尾章治郎理事・副学長の開会の辞に引き続き、Kelner 博士から、「Scientific Publishing: Choices and Challenges」というタイトルで、Science 誌の論文選考のプロセス、採用される原稿の作成方法や日本の科学者たちが研究者として成功するうえで役に立つ情報などについてのお話がありました。次に米田教授から、これまでの研究内容の紹介とサイエンス誌に投稿して採用されるまでの道のりとその苦労話、また Science 誌に掲載されたことによる効果などについてご紹介いただきました。

Science 誌をはじめとする質の高いジャーナルへの投稿というチャレンジ精神を湧き立たせるとともに、研究の質の向上に資する非常に有意義なセミナーでした。



## 評価室

### 19年度に係る業務の実績に関する評価結果の公表

各国立大学法人の平成19年度の年度評価結果が国立大学法人評価委員会から公表されました。

大阪大学では、これまでの教育研究の質の向上と業務運営の改善に積極的に取り組んできましたが、「業務運営の改善・効率化」、「その他の業務運営に関する重要事項」に関して、本学の自己評価と同評価委員会での評価が異なる事項がありました。なお、「財務内容の改善」、「自己点検・評価及び情報提供」の進捗状況は、「中期目標・中期計画の達成に向けて順調に進んでいる」との評価を受けました。項目別評価の評定は、「4・4・4・2」です。

年度評価結果としては、厳しい評定と受け止めていますが、大阪大学の第一期中期計画の完全達成に支障をきたすものではありません。大学全体として各計画の完全遂行に努めていただきますようお願いいたします。

改めて、各部局におかれましては、業務実績報告の作成にご協力いただき大変ありがとうございました。

同評価結果については、ホームページに掲載していますので、ご覧ください。

(大学HPアドレス [http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/pdf/hyouka\(h19\).pdf](http://www.osaka-u.ac.jp/jp/information/joho/pdf/hyouka(h19).pdf))

#### 【評価結果抜粋】

##### 1 全体評価

大阪大学は、教育・研究・社会貢献を通して国民と社会の信託に応えることにより、「地域に生き世界に伸びる」という理念の実現に向けての取組を積み重ね、成果を上げている。特に、平成19年10月の大阪外国語大学との統合は、新生・大阪大学として、これまでの両大学の教育研究リソースを最大限に活用し、大阪の知の基盤となるものであり、「地域に生き世界に伸びる」という理念を具体化している。

一方、研究費の不正使用防止のための体制・ルールに関して、研究機関における委員会の設置、通報者の保護等について整備されていないことから、早急な対応が求められる。

この他、業務運営について、有望な若手教育研究者の確保及び育成を図るため、当該部局等で採用した若手教員について、雇用継続可能地位への移行制度（テニュア・トラック制）を実施する場合における指針を策定している。

財務内容については、「財務体質手段としての大学基金の創設」をまとめ、100億円規模の「基金」の創設及び基金の原資である寄附金獲得のための責任ある受入体制を、総長主導の下で大学全体が構築する具体化に向けた作業について、提言を行っており、今後の取組が注目される。

自己点検・評価、情報提供については、平成16～18年度における入学者数、卒業・修了者数、研究費等、留学生数、決算概況等について、3年間の経年変化がわかるデータ、科学研究費補助金採択数や論文引用数等の基礎的な活動状況と研究成果の国内、国外における相対的な位置を明確にした「大阪大学業績集2004 - 2006」を作成し、ウェブサイトで公表している。

施設設備の整備・活用等については、施設マネジメントを総合的に実施するため、施設部課改組を行い、企画機能の強化（デザイン力の向上）、マネジメントにかかるPDCAサイクルの確立、併せて人材育成等、事務機構改革に関する基本構想に即した事務組織体制への見直しを図っている。

教育研究の質の向上については、大阪外国語大学との統合に伴い、新たに外国語学部、言語文化研究科言語社会専攻、文学研究科文化動態論専攻、人間科学研究科グローバル人間学専攻、法学部国際公共政策学科等を設置するとともに、世界言語研究センター、日本語日本文化教育センターを設置し、統合による新たな教育体制を構築している。

##### 2 項目別評価

|                     |   |                 |
|---------------------|---|-----------------|
| (1) 業務運営の改善及び効率化    | 4 | 5: 特筆すべき進捗状況にある |
| (2) 財務内容の改善         | 4 | 4: 順調に進んでいる     |
| (3) 自己点検・評価及び情報提供   | 4 | 3: おおむね順調に進んでいる |
| (4) その他業務運営に関する重要事項 | 2 | 2: やや遅れている      |
|                     |   | 1: 重大な改善事項がある   |

## 達成状況評価の実施

9月～11月にかけて、部局に対する達成状況評価を実施します。達成状況評価は、4月に提出された部局達成状況評価シートを用いて、評価室において達成状況評価書を作成することにより行います。

コメントは、教育、研究、その他の下に設けた小項目ごとに、平成19年度実績で特に努力が見られる点や根拠データの整備状況、平成19年度実績と平成20年度計画との整合性、中期計画の達成に向けての観点から行います。

また、今回は、中期目標期間の評価（暫定評価）として、平成16～19年度までの実績について、総合的な評価を記載します。

10月下旬には、評価結果を送付する予定ですので、各部局におかれては、平成20年度の計画の推進及び平成21年度計画の策定に活用いただくようお願いします。

## 教員基礎データの更新状況

今後も引き続き、部局、教員にとって、登録・活用しやすいデータベースになるよう、システム整備に取り組んで参りますので、ご協力のほど、よろしくお願いします。また、ご意見、ご要望については、データ管理分析室まで遠慮なくお寄せください。

平成20年9月19日現在

教員基礎データ更新状況報告

|                        | 2007年度 |       |        | 2008年度 |       |        | 登録されている2007年度業績数 |      |      |
|------------------------|--------|-------|--------|--------|-------|--------|------------------|------|------|
|                        | 在籍人数   | 更新人数  | 更新割合   | 在籍人数   | 更新人数  | 更新割合   | 論文件数             | 著書件数 | 受賞件数 |
| 文学研究科                  | 100人   | 90人   | 90.0%  | 100人   | 93人   | 93.0%  | 447件             | 66件  | 1件   |
| 人間科学研究科                | 97人    | 50人   | 51.5%  | 98人    | 51人   | 52.0%  | 202件             | 65件  | 5件   |
| 経済学研究科                 | 52人    | 27人   | 51.9%  | 51人    | 22人   | 43.1%  | 59件              | 11件  | 1件   |
| 法学研究科                  | 36人    | 15人   | 41.7%  | 35人    | 23人   | 65.7%  | 58件              | 13件  | 0件   |
| 理学研究科                  | 222人   | 199人  | 89.6%  | 223人   | 101人  | 45.3%  | 622件             | 32件  | 8件   |
| 医学系研究科(附属病院含む)         | 581人   | 226人  | 38.9%  | 580人   | 176人  | 30.3%  | 904件             | 64件  | 13件  |
| 歯学研究科(附属病院含む)          | 130人   | 56人   | 43.1%  | 129人   | 70人   | 54.3%  | 179件             | 26件  | 16件  |
| 薬学研究科                  | 56人    | 45人   | 80.4%  | 52人    | 42人   | 80.8%  | 250件             | 8件   | 4件   |
| 工学研究科                  | 466人   | 399人  | 85.6%  | 475人   | 356人  | 74.9%  | 2522件            | 94件  | 113件 |
| 基礎工学研究科                | 182人   | 91人   | 50.0%  | 182人   | 103人  | 56.6%  | 501件             | 15件  | 29件  |
| 言語文化研究科                | 98人    | 69人   | 70.4%  | 97人    | 48人   | 49.5%  | 77件              | 29件  | 5件   |
| 国際公共政策研究科              | 33人    | 25人   | 75.8%  | 34人    | 28人   | 82.4%  | 94件              | 15件  | 0件   |
| 情報科学研究科                | 92人    | 79人   | 85.9%  | 91人    | 57人   | 62.6%  | 555件             | 12件  | 26件  |
| 生命機能研究科                | 74人    | 44人   | 59.5%  | 75人    | 16人   | 21.3%  | 104件             | 4件   | 4件   |
| 高等司法研究科                | 25人    | 9人    | 36.0%  | 26人    | 23人   | 88.5%  | 122件             | 32件  | 0件   |
| 微生物病研究所                | 91人    | 24人   | 26.4%  | 85人    | 29人   | 34.1%  | 82件              | 2件   | 0件   |
| 産業科学研究所                | 128人   | 59人   | 46.1%  | 123人   | 52人   | 42.3%  | 256件             | 4件   | 11件  |
| 蛋白質研究所                 | 49人    | 21人   | 42.9%  | 45人    | 38人   | 84.4%  | 101件             | 8件   | 2件   |
| 社会経済研究所                | 17人    | 13人   | 76.5%  | 15人    | 8人    | 53.3%  | 115件             | 7件   | 1件   |
| 接合科学研究所                | 34人    | 34人   | 100.0% | 34人    | 34人   | 100.0% | 469件             | 30件  | 29件  |
| 低温センター                 | 2人     | 2人    | 100.0% | 2人     | 2人    | 100.0% | 7件               | 0件   | 0件   |
| 超高圧電子顕微鏡センター           | 6人     | 4人    | 66.7%  | 6人     | 4人    | 66.7%  | 17件              | 1件   | 0件   |
| ラジオアイソトープ総合センター        | 2人     | 2人    | 100.0% | 2人     | 1人    | 50.0%  | 8件               | 0件   | 0件   |
| 環境安全研究管理センター           | 3人     | 3人    | 100.0% | 3人     | 2人    | 66.7%  | 6件               | 0件   | 0件   |
| 留学生センター                | 11人    | 9人    | 81.8%  | 10人    | 4人    | 40.0%  | 13件              | 3件   | 1件   |
| 生物工学国際交流センター           | 4人     | 4人    | 100.0% | 4人     | 4人    | 100.0% | 18件              | 0件   | 2件   |
| 極限量子科学研究センター           | 7人     | 4人    | 57.1%  | 7人     | 4人    | 57.1%  | 7件               | 0件   | 1件   |
| 太陽エネルギー化学研究センター        | 4人     | 0人    | 0.0%   | 5人     | 4人    | 80.0%  | 37件              | 1件   | 1件   |
| 総合学術博物館                | 6人     | 5人    | 83.3%  | 6人     | 3人    | 50.0%  | 12件              | 0件   | 0件   |
| 大学教育実践センター             | 21人    | 10人   | 47.6%  | 22人    | 9人    | 40.9%  | 25件              | 3件   | 4件   |
| 先端科学イノベーションセンター        | 15人    | 12人   | 80.0%  | 20人    | 7人    | 35.0%  | 42件              | 2件   | 0件   |
| 保健センター                 | 13人    | 6人    | 46.2%  | 13人    | 2人    | 15.4%  | 19件              | 6件   | 0件   |
| 臨床医学融合研究教育センター         | 18人    | 7人    | 38.9%  | 22人    | 8人    | 36.4%  | 29件              | 5件   | 1件   |
| コミュニケーションデザイン・センター     | 21人    | 7人    | 33.3%  | 21人    | 7人    | 33.3%  | 20件              | 6件   | 1件   |
| 金融・保険教育研究センター          | 4人     | 1人    | 25.0%  | 4人     | 2人    | 50.0%  | 5件               | 0件   | 0件   |
| 科学教育機器リノベーションセンター      | 1人     | 0人    | 0.0%   | 1人     | 0人    | 0.0%   | 0件               | 0件   | 0件   |
| グローバルコラボレーションセンター      | 10人    | 3人    | 30.0%  | 11人    | 0人    | 0.0%   | 0件               | 0件   | 0件   |
| 世界言語研究センター             | 62人    | 42人   | 67.7%  | 72人    | 18人   | 25.0%  | 21件              | 8件   | 2件   |
| 日本語日本文化教育センター          | 19人    | 8人    | 42.1%  | 19人    | 1人    | 5.3%   | 0件               | 0件   | 0件   |
| 核物理研究センター              | 21人    | 13人   | 61.9%  | 20人    | 13人   | 65.0%  | 106件             | 0件   | 0件   |
| サイバーメディアセンター           | 24人    | 20人   | 83.3%  | 26人    | 21人   | 80.8%  | 170件             | 1件   | 9件   |
| レーザーエネルギー学研究センター       | 32人    | 26人   | 81.3%  | 31人    | 28人   | 90.3%  | 149件             | 4件   | 7件   |
| ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構 | 7人     | 2人    | 28.6%  | 6人     | 0人    | 0.0%   | 6件               | 0件   | 0件   |
| サステイナビリティ・サイエンス研究機構    | 5人     | 4人    | 80.0%  | 5人     | 1人    | 20.0%  | 15件              | 0件   | 0件   |
| 免疫学フロンティア研究センター        | 7人     | 0人    | 0.0%   | 14人    | 0人    | 0.0%   | 0件               | 0件   | 0件   |
|                        | 2888人  | 1769人 | 61.3%  | 2902人  | 1515人 | 52.2%  | 8451件            | 577件 | 297件 |

備考：対象教員：常勤(任期付、特任、休職を含む)かつ部局に専任で雇用されている教員

(2007年度分：2008年3月時点で在籍した教員を対象、2008年度分：2008年9月時点で在籍している教員を対象)

\*更新人数：該当年度で一件以上のデータを更新した人の数

\*対象データ：2007年4月から2008年3月までを対象

## 財務室

### 平成19年度決算説明会

本学構成員を対象に大学財政の理解向上を図ることを目的とし、8月20日(水)、21日(木)にコンベンションセンターで決算説明会を行いました。

残暑の厳しい中、理事、教員及び職員など両日で220名を超える参加者があり、平成19年度決算のほか、国立大学法人の法体系、中長期予算の在り方、基金、資金運用の内容について説明を行いました。

### 平成19事業年度財務諸表の承認

平成20年9月10日付けで文部科学大臣より、利益の処分に関する書類(案)を除いて、平成19事業年度財務諸表が承認されました。この承認を受けて、9月29日付けの官報に掲載し、本学のホームページでも公開しています。

URL : [http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/information/joho/zaimu\(h19\).html](http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/information/joho/zaimu(h19).html)

### 基金検討ワーキングの検討状況

財務室の下に設置された基金検討ワーキングでは、大阪大学の基金の基本的な在り方について、本年4月より活発な議論を重ね、平成20年7月3日に第1次報告をまとめました。

本第1次報告では、大阪大学基金(仮称)の募集の目的、基金の用途などについての考え方が整理されており、基金担当及び、後援会担当の両総長補佐との意見調整を踏まえて、平成20年7月22日開催の財務基盤整備本部会議において審議されました。その結果、大学としての基金を設置すること、財務基盤整備本部会議の下にワーキングを設置し、基金検討ワーキングとの合同ワーキングとすることなどが決定されました。

今後は、合同基金検討ワーキングと基金検討ワーキングが連携しながら、大阪大学基金(仮称)の設置に向けて、より具体的な検討作業を進めてまいります。

### 平成20年度教育研究等重点推進経費の追加公募

平成20年度教育研究等重点推進経費の追加公募について、本学の現状や将来の方向性を戦略的に見据え、全学的もしくは部局横断的な観点から推進・改善すべき教育研究等に関わる重要事項に充当する経費の要求を、10月10日(金)までに提出していただくよう、平成20年9月24日付けで、各室・各部局あてにお知らせいたしました。

今後、提出のあった要求事項について、財務室員による書類審査・ヒアリング審査を踏まえて、執行計画案を策定し、12月の役員会で審議・承認をいただく予定です。

## 広報・社会学連携室

### 21世紀懐徳堂の活動

#### 第1回21世紀懐徳堂シンポジウム「地域と大学が一緒に考える」まち育て」開催

大阪大学21世紀懐徳堂主催第1回目のシンポジウムとなる今回は、大学から飛び出し、大阪大学にゆかりのある中之島で、市民の皆さんと一緒に、もう一度“大阪”という街の歴史、文化を見つめ直し、自らの手で学問所を作り上げるパワーを持っていた大坂町人ら先人たちにまけないような“ひと”“まち”をつくるためには、なにをすべきかを参加者の皆さんとともに考えてゆくイベントとして開催されました。

シンポジウムでは、現在大阪大学が取り組んでいる社会学連携のパイロットケースを紹介しながら、次世代型連携へ踏み出す第一歩として、タウンホールミーティングを開催し、大学人、文化人からの一方通行の情報発信だけでなく、学生そして一般の方にも加わってもらい話し合いました。

- 開催日：10月16日（木）
  - 会場：大阪市中央公会堂 3F 中集会室
  - プログラム：【第1部】 未来に引き継がれる“まち”の記憶  
【第2部】 一緒に考える「これからの地域と大学の“社会学連携”」
  - 後援：大阪市
- シンポジウムの詳しい内容は次号でお知らせします。

### 大阪市との連携事業「21世紀懐徳堂講座」

大阪大学は、大阪市と包括連携協定を締結しており様々な連携事業を進めています。この講座では、連携事業の一つとして、淀屋橋駅近くに今年オープンした「淀屋橋 odona」にある大阪市まちづくり情報発信施設 i-spot において本学の教員が小講演を行う企画です。文学、歴史、医療、サイエンス・・・様々な分野の講義題目を設定し、オフィス街を行き交う人々にぶらっと立ち寄っていただき、大阪大学の知を学んでいただく絶好の機会となります。本年は、10月～12月の間に複数回開催する予定です。

詳しくは21世紀懐徳堂ホームページをご覧ください。→ <http://21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp/>

### 広報誌の抜本的見直しについて



現在、広報・社会学連携室では、広報基盤整備本部の指示により、今までは担当部署で個別に作成されていた広報誌全般を見直し、大学の刊行物として統一性が得られるようリニューアル方法について議論を重ねています。

また、大阪大学の広報戦略にかかる問題点等についても議論を重ね、大学のブランド力を高めるための広報戦略を打ち出したいと考えています。

## 国際交流室

### 大阪大学 - 東北大学合同フォーラムと鷲田総長のサンフランシスコ訪問

9月18日に本学サンフランシスコ教育研究センターと東北大学の米国代表事務所が共同で標記のフォーラムを開催しました。午後1時からのフォーラムに引き続き、レセプションが行われるという半日のイベントでした。今回のフォーラムは両大学の首脳がキーノートスピーチを行い、その後両大学の誇る研究プロジェクトを紹介し、バイエリアでのプレゼンス向上に資するという趣旨で企画されたもので、およそ180名の参加があり、所期の目的を達成することができました。フォーラムの内容に関しては本誌に報告がありますのでご覧ください。このようにわが国の大学が、国外で共同イベントを行ったという例はいままで余りなかったようです。総長のスピーチを含めるという企画であることから、両大学の現地オフィス間の連絡だけでなく、両大学執行部との連絡調整も必要となり、具体的な実施案が固まるまでかなり苦労しました。しかし、そのお蔭で、国際交流担当理事および事務担当者同士のコミュニケーションが大変スムーズになったという副次的効果もありました。

前日には、在サンフランシスコ日本総領事館に両大学の関係者とバイエリア大学関係者が招待され、晚餐会が開かれました。長嶺総領事はバイエリアにおいて最近とみに日本のプレゼンスが低下しつつあるという認識を持っておられるので、両大学のように事務所を構えプレゼンス向上を図るというような活動を好意的に受け止め、なにかと協力して下さい、翌日のフォーラムにも、オープニングアドレスからレセプションまでお付き合い下さいました。

鷲田総長には、今回が総長就任後初めての海外での公式行事となりました。本学のサンフランシスコ教育研究センターを訪問されたのはもちろんですが、フォーラムの翌日には、スタンフォード大学とカリフォルニア大学バークレー校を歴訪されました。スタンフォードでは、工学研究科河田教授のお世話で、アン・アービン研究担当 Dean、リチャード・セラー人文科学系 Dean、ならびにスタンフォード・フォトニクス研究センター長のトーマス・ベア教授らに会い、懇談されました。残念ながらこの日はスタンフォード大学への新入生の家族が招待される日で、ヘネシー学長との懇談は設定できませんでした。一方バークレー校では、本学サンフランシスコセンターのアレンジで、バーゲナウ学長のほか、国際担当 Dean のジョン・リー教授とも懇談されました。バークレー校においては州政府からの資金が 30% に満たなくなったそうで、いかに資金を集めるかが学長の大きな関心事であり、とくに企業ではなく個人からの寄附集めに力を注いでいるとのことでした。これまでも本学の研究者とスタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー校の研究者とは、かなりのお付き合いがありますが、今回の訪問が、今後本学との交流強化につながることを願っています。



バークレー校の学長室にて



スタンフォード大学チャペルの前にて

## 欧州との学生交流プログラム「ICIECP」への申請 2 件採択

欧州ではボローニャプロセスと呼ばれる高等教育システムの標準化への取り組みや、エラスムス・ムンドゥスという国境を越えた高等教育プログラムの実施などが盛んに行われています。最近では欧州以外の国との間での学生の流動化を目指して、資金を伴うプログラムへの参加募集を行っています。本学は、そうしたプログラムの一つである先導的留学生交流プログラム支援制度 - Industrialised Countries Instrument Education Cooperation Programme (ICIECP) [Joint Mobility Project] に 2 件申請しましたが、この度、幸い 2 件とも採択されました。

このプログラムは、日本と EU の両方で、日本側は 2 大学以上、欧州側は国の異なる 3 大学以上がコンソーシアムを組み、それらの大学間で学生の交流を行うものです。基本的に大学院前期課程の学生が対象となり、同課程の 1 セメスターを国外の大学で過ごすという、いわゆる One semester abroad プログラムです。つまり、日本側の学生は、EU 側コンソーシアム内の大学の一つへ 1 セメスター留学し、反対に、EU 側からは、日本側コンソーシアム内の大学へ 1 セメスター留学します。交流する学生数は、1 プロジェクト当たり年間 10 名程度で、期間は 2-3 年間です。EU 側の費用は EU から、日本側の費用は日本学生支援機構 (JASSO) から支援されます。

国際企画推進本部では、学生交流推進に力を注いでおり、欧州に関しては昨年 EU 本部から担当者を招聘して国際シンポジウムを開催した経緯があります。そのため今回は、企画推進本部自らが企画して申請を行うこととしました。また、工学研究科では、以前、同様のプロジェクト (EU/Japan パイロットプロジェクト) に採択され学生交流を実施した実績のあるグループがあり、そのグループをベースに新たに申請する方向で検討が進んでいました。申請書締め切りまでの期間が 40 日程度と大変に短かったのですが、結果的にこれらの 2 件 (以下にプロジェクト名を記します) とも申請することができました。2 件とも採択されたのは快挙と言えます。

表：先導的留学生交流プログラム支援制度 ICIECP 採択プロジェクト一覧

| 採択プロジェクト名                                                     | 日本                          | EU                                                                          |
|---------------------------------------------------------------|-----------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 自然科学高等大学生教育に於ける EU-Japan 国際交流プログラム<br>(派遣交流留学生数：3 年間で 30 名以内) | 大阪大学 (代表)<br>京都大学<br>東北大学   | グローニンゲン大学 (オランダ) (代表)<br>ウプサラ大学 (スウェーデン)<br>ボーフム大学 (ドイツ)<br>ハイデルベルグ大学 (ドイツ) |
| 学際的グローバル機械工学教育<br>(派遣交流留学生数：2 年間で 45 名以内)                     | 大阪大学 (代表)<br>東京大学<br>東京工業大学 | デルフト工科大学 (オランダ) (代表)<br>デンマーク工科大学 (デンマーク)<br>王立工科大学 (スウェーデン)                |

国際企画推進本部がこのプロジェクトにとくに関心を寄せたのは、これが EU 諸国との学生交流推進のモデルケースとなると考えたからです。「1 セメスターアブロード」のプログラムですが、「卒業を遅らせないこと」がプロジェクト実施の条件の一つとなっています。つまり、留学を学位取得に至るまでの教育課程に組み込む、ということに正面から取り組む必要があるのです。このために留学先での就学成果を持ち帰る、つまり単位互換に関する取り決めを行うことが基本的に重要になります。今後、採択されたプロジェクトの実施に係る一連の作業を通して単位互換のノウハウが蓄積され、日欧の学生交流が盛んになることを期待しています。詳しいことは国際企画推進本部までお問い合わせ下さい。

# 夢と誇りを持った大学職員を目指して

## 大阪大学若手職員勉強会から

- ・「大阪大学職員」という職業に誇りを持っているか？
- ・10年後の自分は大学で何をしているのか？
- ・今の自分は大学の役に立っているのか？
- ・大学で働くとはどういうことなのか？
- ・大学の法人化とは何だったのか？何が変わったのか？

これらの考えを持つ職員が集まって、勉強会を運営しています。勉強会自体が始まったのは、平成18年12月。2年目にして、ようやく「坂上会」と命名され、すべきことも見え始めてきました。歩みは遅いかもしれませんが、確実に前へと進んでいる実感はあります。現在、メンバーは主任から入職1年目の職員まで約15名。月に2回のペースで活動を行っています。

### ■ 勉強会ではこんなことをやってます

勉強会結成当初は、自分の職務上の「身近な疑問点」や「解決すべき問題点」を各自でまとめて発表すること、社会人としてのビジネス・スキル（プレゼン技法・資料の読み方）を身につけることなどを目的としていました。そして、回を重ねるごとに、メンバーが抱える様々な課題や問題提起が浮かび上がってきました。しかし、それらを端的に整理することもできないまま、会を継続していた時期もありました。そこで、「K-J法」というブレイン・ストーミングの手法を取り入れ、「大学のここが嫌、ここを変えたい」という課題について、メンバーで思いつくままにすべてを列挙してみました。それらを体系化すると、私たちの仕事に対する課題は、

- ・「職員の意識の問題」（挨拶ができない、仕事に対する責任感がない、大学を良くしたいという機運が感じられない…）
- ・「組織の縦割り」（極端なセクショナリズム、仕事のなすり付け合い、隣がどんな仕事をしているかわからない…）
- ・「業務の効率化」（無駄な作業が多い、通知が多い、仕事のフローが機能していない、仕事に偏りがある…）

の3つに分類されることがわかりました。現在は、それらの問題の背景や理由、そして解決方法などについて、グループに分かれて議論、発表を重ねて、自分たちの見識を深めています。

また、自分達で勉強会を運営していくことで、会議の進め方、人の意見の聴き方、議論における結論の出し方といった、今後、私たちに確実に必要になるであろう会議力を磨くことにもつながっています。

### ■ 「坂上会」（さかのうえかい）の由来

かつて、大阪が「天下の台所」と呼ばれ「上方」として賑わっていた時代、文化の発信地は間違いなく大坂でした。

街には活気があふれ、人々の知的好奇心は旺盛でした。そのような中、大坂の地に懷徳堂、適塾が興りました。「大阪大学は町人が創った大学」と呼ばれる所以です。私たちは当時の建学の精神を心に留め、前を見なければなりません。

大坂の「坂」の字は、縁起が悪いとの認識から「阪」の字に変わりましたが、今私たちが本当に大切なものは何なのか、何を目指すべきなのか、を考えたときには、



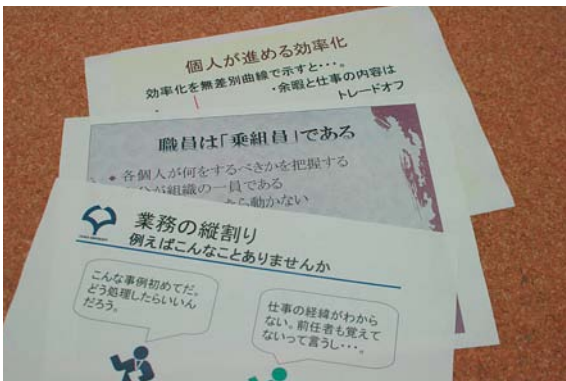
原点に立ち返って、敢えて坂の上を目指さなければならない時もあるでしょう。その勇気を持つことが重要になります。それらのことを踏まえ、「坂の上にあるものを探しに行く」意味を込めて、勉強会の名を「坂上会（さかのうえかい）」としました。また、昨年10月に統合した旧大阪外国語大学出身の司馬遼太郎氏の代表作品『坂の上の雲』では、明治維新により鎖国政策から解放された日本を舞台にしており、登場人物だけをみると、自身を見つめ、世界に羽ばたこうとする気概にあふれた者たちの生き様が痛いまでに克明に描写されています。その情景は、まさに今の私たちと通じるものがあります。



自分の仕事に誇りを持つことを意味します。その個々の総体として、大阪大学という組織のアイデンティティの形成に寄与できれば本望であると考えます。

## ■ これからの坂上会

大学を運営するにあたって、事務職員が主体となって、学生の教育、教員の研究のサポート、地域との連携に携わることが必要となるでしょう。そのためには、事務職員の能力開発が重要であることは間違いありません。そこで、今後は坂上会のメンバー内での学習に限らず、学内の教職員の方に講師として来ていただいたり、他国立大学にある勉強会とも連絡を取りながら、「国立大学法人職員」のあるべき姿を議論したり、私立大学や民間企業の方にも来ていただくなどしながら、大阪大学がよりよい方向に進むために、私たちの抱える問題点を多角的に検討できるようにもしたいと考えています。



和やかな中でも活発な意見交換を行っております。もし、会に興味を持たれた若手職員の方がおられましたら、少しだけアンテナを伸ばして私たちに声を掛けてください。一緒に素敵な大学を作りましょう！

連絡先：大阪大学若手職員勉強会「坂上会」 [sakaue-osu@live.jp](mailto:sakaue-osu@live.jp)

## APRU学生サマープログラムに参加

本学が加盟しているAPRU (Association of Pacific Rim Universities : 環太平洋大学協会) は、毎年、加盟大学の学生同士の交流を目的に学部学生サマープログラムを開催していますが、今年は7月7日(月)から18日(金)までの間、上海(中国)の復旦大学で実施されました。今年の対象者は経済専攻の学部学生で、本学からは経済学部4年の大西剛史さんが参加しました。講義や課外活動による交流のみならず、ゲストハウスでのルームシェア、ドリンクパーティー、地元のレストランでの会食等を通じた参加各国の学生との交流で、講義以上の収穫を得ることができたとのこと。今後も本学学生の積極的な参加を期待します。



### サマープログラム概要

テーマ : Economy and Culture of A Modern China

内容 : 著名研究者・教員による講義、グループセミナー(学生同士のディスカッション)、毎日30分ずつの中国語講習、カンフー講習、フィールドスタディ(美術館・寺院訪問、上海ヤクルト工場見学、上海雑伎団鑑賞) 杭州観光 等

他の参加大学 : (計21大学)

オレゴン大学、南カリフォルニア大学、UCLA、UCバークレー、UCサンディエゴ、ロシア極東国立大学、香港科学技術大学、国立台湾大学、北京大学、浙江大学、復旦大学、ソウル国立大学、シンガポール国立大学、シドニー大学、チリ大学、インドネシア国立大学、チュラロンコン大学、東京大学、京都大学、慶應義塾大学

参加者数 : 41名

(大阪大学国際交流室のサイトに大西さんの参加レポートが掲載されています。こちらをご覧ください。)

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/international/iab/index.html>

(国際部国際交流課)

## APRU第9回博士課程学生会議に参加

本学が加盟しているAPRU (Association of Pacific Rim Universities : 環太平洋大学協会) が主催する博士課程学生会議(DSC; Doctoral Students Conference)は、APRU加盟大学の大学院博士後期課程に在籍する学生のネットワークDSN (Doctoral Students Network) が中心に企画・運営する国際学術会議です。9回目を迎える今年は7月13日(月)から18日(金)までの間、ウラジオストク(ロシア)の極東国立大学で実施され、本学からは大釜徳政さん(医学系研究科)、道畑正岐さん(工学研究科)、小木麻里子さん(言語文化研究科)の3名が参加しました。

専攻分野に関わらず広く院生同士の交流や学際的研究を促進するこの会議に参加することにより、研究を継続するうえでの示唆や刺激を受けることができます。今後も一人でも多くの院生が本会議に参加できるよう、奨励していきたいと思います。

### 会議概要

テーマ : Leading Research for a Better Future;

Pacific Scope, Global Impact

内容 : ・教授による特別講演

・参加学生によるプレゼン(英語)と質疑応答  
分野は、化学、言語教育、物理、工学、法律、医療、金融、IT、政治、哲学、経済等々多岐に亘る。



左から大釜さん、小木さん、道畑さん

他の参加大学 :

ロシア極東国立大学、インドネシア大学、シドニー大学、マラヤ大学、シンガポール国立大学、ソウル国立大学、オークランド大学、南カリフォルニア大学、チュラロンコン大学、北京大学、ブリティッシュコロンビア大学、香港科学技術大学、フィリピン大学、清華大学、UCLA、東京大学、京都大学、早稲田大学、慶應義塾大学 等

(大阪大学国際交流室のサイトに参加者のレポートが掲載されています。こちらをご覧ください。)

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/international/iab/index.html>

(国際部国際交流課)

## パネルディスカッション『企業法務のしごと』開催

目下、司法修習生の法曹採用が極めて厳しいとされているなか、高等司法研究科学生生活等サポート委員会（委員長・池田辰夫教授）の主催で、パネルディスカッション『企業法務のしごと』が、エクスターンシップ実施前の7月10日（木）に法経講義棟1番教室で開催されました。



法曹としてのさまざまな活動にとって企業法務の知見は不可欠となっていますが、これをさまざまな角度から見つめるべく、大手企業の法務担当者（関西電力、阪神電鉄、松下電器〔現パナソニック〕、三井物産）にお集まりいただき、企業法務について具体的なプレゼンテーションと質疑応答が行われました。法科大学院生には学修上の指針への参考素材を提供するとともに、すべての参加学生にとってキャリアデザインを深める一助とするものとなりました。今回、「企業法務のしごと」が具体的にどのように動いているのかを知ることで、広い意味での法曹を目指す学生にとっては、大きな刺激となったものと思われます。主として法科大学院生を対象としたものでしたが、関心のある理系学部生を含め、学生35名の参加を得ました。

予定の時間を30分程度オーバーするほど熱のこもったやりとりが行われ、参加学生のアンケート結果を踏まえて、今後の学生支援の在り方が深められる予定です。

（高等司法研究科）

## 特別公開講義「法律事務所の立ち上げ」開催

7月15日（火）弁護士南川博茂氏、外山弘氏、尾崎一浩氏、新谷俊彦氏を特別講師としてお招きし、高等司法研究科授業「ベンチャー社会と法」を一般学生にも公開し、高等司法研究科・法学研究科附属法政実務連携センター主催の特別公開講義「法律事務所の立ち上げ」として行いました。

「ベンチャー社会と法」では、現代社会における起業の意味、会社組織のあり方といった起業・経営の知識を学んでいます。今回の特別講義ではまず通常の講義内の10班を3つに分け、グループごとにおひとりの先生にご指導いただきました。学生たちは、特別講義に先立ち「法律事



務所」を起こす場合に想定される問題とその解決に至る道筋を班ごとに討論し、その成果についてプレゼンテーションを行い、次に、討論のなかで確認されたさまざまな疑問を弁護士の方々に直接投げかけました。聴講生も含め参加者からの意見や質問は途絶えることがなく、講義時間は3時間にわたりました。先生方からは、学生たちの斬新な発想と実現可能性との乖離を埋めるための適切なアドバイスを頂くことができ、学生たちが弁護士の方々と直接議論する貴重な機会となりました。

（法学研究科・法学部、高等司法研究科）

## 「海の日」船舶海洋試験水槽一般公開

工学研究科地球総合工学専攻船舶海洋工学部門では、(社)日本船舶海洋工学会 関西支部の支援により、7月21日(月・祝)の「海の日」に、本年も船舶海洋試験水槽をはじめ当部門関連施設の一般公開を行いました。この催しは「海の日」が制定された平成8年から、近隣小学校の高学年児童と保護者を対象として毎年行っており、今年で13回目を迎えました。

当日は30 を超える真夏日の中、児童・保護者を合わせて昨年度を上回る202名にご参加いただき、盛大に開催されました。

全長100mの船舶海洋試験水槽でのパラメトリック横揺れ実験の見学、風洞実験棟での模型飛行機の浮揚実験や風圧体験、当部門で開発中のイカロボットの実演と操縦体験、教室での大気圧、浮力についての模擬講義、ウォータジェット船作りなど例年以上に盛り沢山の内容でした。

最近では熱心なリピーターの方々もおられ、この催しが地域に着実に根付きつつあることが実感されました。今後も地域の皆様に喜んでいただけるよう努力していくこととしています。

(工学研究科・工学部)



船舶海洋試験水槽での実験

## セクシュアル・ハラスメント防止等に関する研修実施

7月28日(月)及び8月1日(金)、セクシュアル・ハラスメント防止等に関する研修がコンベンションセンターMOホールにおいて実施されました。この研修は、事務局に勤務する役員及び教職員を対象とし、セクシュアル・ハラスメントの防止を目的としたもので、417名が参加しました。

本研修では、本学セクシュアル・ハラスメント相談室の周藤由美子専門相談員及び中嶋雅美専門相談員から「セクシュアル・ハラスメントの防止のために～あなたにできること～」と題する講演が行われました。



須藤相談員



中嶋相談員

講演では、1. 深刻なセクシュアル・ハラスメント被害の影響、2. セクシュアル・ハラスメントをめぐる主な流れ、3. なぜセクシュアル・ハラスメントがなくなるのだろうか、4. セクシュアル・ハラスメントの加害者や周囲への影響 について、それぞれ分かりやすく説明されました。

最後に「セクシュアル・ハラスメント防止のために、あなたに今できることは何ですか？」との問いかけで、意義深い講演に幕を閉じました。

(総務部人事課)

## 3 大学工学系人材交流プログラム第1回シンポジウム開催

大阪大学、名古屋大学、東京工業大学の3大学工学系研究科で実施している人材交流プログラムの第1回シンポジウムが7月28日(月)、医学部銀杏会館で開催されました。シンポジウムには、川端和明文部科学省基盤政策課長、小野木克明名古屋大学大学院工学研究科長、岡崎 健東京工業大学理工学研究科長・工学系長及び馬場章夫大阪大学大学院工学研究科長、現在このプログラムで他の大学に派遣されている教員6名、シンポジウム参加者36名の総勢46名が出席しました。

馬場研究科長による開会挨拶の後、小野木研究科長、岡崎研究科長・工学系長、川端基盤政策課長からそれぞれ挨拶があり、続いて渋谷陽二大阪大学大学院工学研究科教授よりこのプログラムの概要説明が行われた後、現在派遣されている大竹尚登准教授(東工大→名大)、中川 貴准教授(阪大→東工大)、蒲池利章准教授(東工大→名大)、西澤典彦准教授(名大→阪大)の4名から現状の報告ならびにこのプログラムへ期待される点などについての講演が行われました。また、特別講演として、アライアンスラボ - 附属研究所間連携事業の一環として本学の産業科学研究所



挨拶する馬場研究科長

に滞在している竹内繁樹北海道大学教授から研究連携による交流の現状についての講演も行われました。最後に、来賓や派遣教員等をパネラーとしたパネルディスカッションが熱心に行われ、今後このプログラムを希望する若い教員へのメッセージを送る有意義な機会となりました。

(工学研究科・工学部)

## 「第1回学生・教員懇談会」で共通教育を熱く語る！

7月30日(水)共通教育本館のイ講堂にて「第1回学生・教員懇談会」を開催しました。このイベントは、統合後の新生大阪大学における最初の共通教育の実施を踏まえて、そのより良い在り方を学生と教員が対話をしながら、共に考えていくために企画されました。試験期間終了後であったにもかかわらず、95名(学生57名、教員38名)の参加し、小泉潤二理事・副学長、高杉英一理事・副学長、大和谷 厚学生生活委員会委員長も御出席しました。この問題に対する学生、教員、そして執行部の関心の高さを物語っていると思います。

魅力的な共通教育の授業を展開している下田 正教授(理学研究科)と竹村景子准教授(世界言語センター)による2件の報告の後、グループワークにより共通教育の改革案



について話し合いました。報告は、下田教授は4名の受講生とともに「大学生に学んで欲しいこと - 『自分には関係ない』という意識を壊し、能動的に学ぶ意欲を引き出す試み - 」の題目で、竹村准教授は5名の受講生とともに「アフリカは遠いか - 先入観と固定観念を壊す試み - 」の題目で、それぞれ行われました。

3時間近くに及ぶ熱い語らいは、さらに懇親会へと続き、70名以上が参加して最後まで盛り上がり、学生・教員とも参加者は大変満足していたように感じました。今後、大学教育実践センターでは、より多くの幅広い学生・教員を巻き込みながら対話を継続し、より広がりのある取組にしていきたいと考えています。

(大学教育実践センター)

## 第30回基礎工学部公開講座「未来を拓く先端科学技術」開催

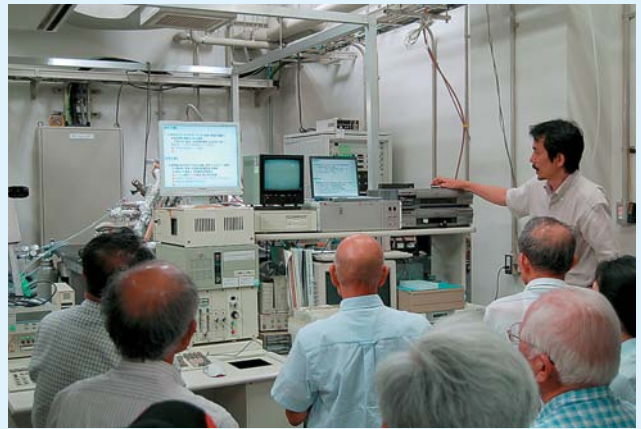
基礎工学部公開講座「未来を拓く先端科学技術」が、8月4日(月)～7日(木)の4日間にわたり、基礎工学部国際棟(シグマホール)において開催されました。

今年で30回を数える本講座は、基礎工学部からの情報発信の一環として1979年から毎年開催されており、地域社会と大学との連携を深めるための重要な役割を担っています。

今回は、基礎工学研究科、情報科学研究科及び生命機能



講義の様子



研究室見学の様子

研究科の教員9名が、自らの研究成果や科学技術について、当該研究分野の歴史にはじまり最新の動向まで、分かりやすく講義を行いました。また、講義終了後に実施した研究室見学も大変好評でした。

高校生から80代の方まで、124名の参加者が熱心に講義に取り組み、4日間の公開講座は盛況のうちに終了しました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

## ワークショップ「バイオマスの燃料化の技術交流」開催

サステナビリティ・サイエンス研究機構(RISS)は8月8日(金)、尼崎市の工学研究科附属サステナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター(SDOC)で、ワークショップ「バイオマスの燃料化の技術交流」を開催しました。産官学の研究者、技術者を招き、バイオマス燃料化に関する最先端の研究や先進的事業を紹介し、幅広い議論を行うことを目的に50人が参加しました。

今回のワークショップでは、産業技術総合研究所バイオマス研究センターの坂西欣也センター長、神戸大学大学院の福田秀樹自然科学研究科長、RISSの吉田 登特任教授、京都大学環境保全センターの酒井伸一教授、大成建設エコロジ本部業務推進グループの寺島和秀リーダー、神戸市下水道河川部工務課の小池信男主査、関西再資源化ネットワークの林田季昭部長、環境省地球温暖化対策課の足立晃一課長補佐が各自、取組みを紹介しました。

坂西氏はアジアのバイオマス燃料戦略、福田氏はバイオエタノール製造の高速化への新技術について力説され、吉田氏は環境省委託研究の「下水汚泥の高効率熱分解バイオオイル化技術」の研究成果を発表。酒井氏は京都市のエコ



燃料の取組み、寺島氏は堺市で展開中の草本木質系バイオマスを原料とするバイオエタノール生産技術、小池氏は神戸市で実践する「こうべバイオガス活用技術」、さらに林田氏は堺市が進める炭化・液化・分留による食品系・木質系バイオマスの利活用事業について、それぞれ説明されました。

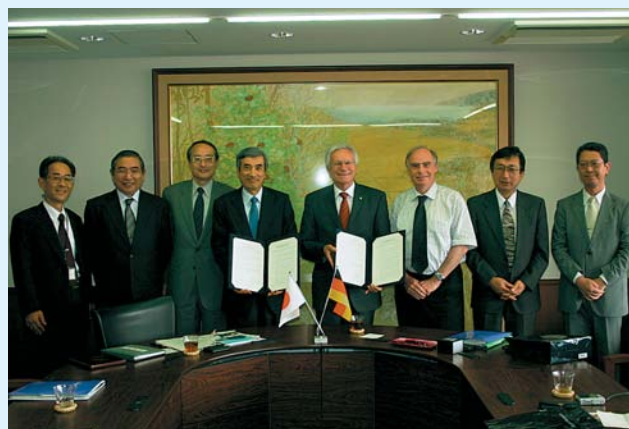
(サステナビリティ・サイエンス研究機構)

## ドイツ・エアランゲン大学と大学間学術交流協定締結

8月20日(水)本部事務局4階役員会議室において、大阪大学とドイツのエアランゲン大学(正式名称:Friedrich-Alexander Universität Erlangen-Nürnberg)との大学間学術交流協定調印式が行われました。

調印式には、同大学のカール・ディテル・グルスケ(Karl-Dieter Gröske)学長、ペーテル・アッケルマン(Peter Ackermann)日本文化研究科教授が来学し、本学からは、鷲田清一総長代理として国際交流室長の辻 毅一郎理事・副学長、陪席として阿部武司経済学研究科長、馬場章夫工学研究科長、戸部義人基礎工学研究科長、福住俊一工学研究科教授、江藤靖弘国際交流課長が出席しました。

同大学とは、基礎工学研究科と極限量子科学研究センタ



ーが2005年に締結した部局間協定に基づき、共同研究が行われています。工学研究科もグローバルCOEプログラム等を通じ、教員の交流を始めたところであり、これらの実績がこのたび大学間学術交流協定の締結に至ったものです。

今後、この大学間学術交流協定を基盤として、18世紀からの歴史と伝統を誇るエアランゲン大学との間でより多彩で高度な研究・教育交流が展開されることが期待されます。

なお、エアランゲン大学の概要については、54ページの「交流協定大学」をご覧ください。

(国際部国際交流課)

## 大阪大学・大阪弁護士会共催シンポジウム開催

8月25日(月)、大阪弁護士会館2Fホールにて、大阪大学・大阪弁護士会共催シンポジウム「企業における弁護士ニーズを考える」が開催されました。本シンポジウムは、大阪大学「法曹の新しい職域」に関する研究会(科研費基盤研究A「法曹の新職域グランドデザイン構築」研究代表者:

三成賢次法学研究科教授)と大阪弁護士会との共催の企画です。大阪弁護士会と大阪大学の共催シンポジウムは、今回が初開催となります。

シンポジウムでは、弁護士のあり方に関する今般の様々な議論を受けて、まず、企業における弁護士ニーズを実証的に明らかにし、それを前提に法科大学院生や若手弁護士はこれからどのようにして企業から業務ニーズを引き出すか、そのためにどのような自己研鑽が必要か、さらに、その際に法科大学院はどのような役割を果たすことが出来るのかといった点について議論いたしました。講演者とコメンテーター、パネリストに恵まれ、またフロアの参加者の関心も高かったこともあり、充実したシンポジウムとなりました。

大阪弁護士会との共催企画は今後もさらに充実させていきたいと考えております。

(法学研究科・法学部)



パネルディスカッションの様子

## 大学国際戦略本部強化事業採択機関ヒアリング

8月27日(水)事務局4階役員会議室において、「大学国際戦略本部強化事業採択機関ヒアリング」が、文部科学省により実施されました。当日は、加藤 敬文部科学省科学技術・学術政策局国際交流官他1名が来学し、本学からは、国際交流室長の辻 毅一郎理事・副学長、国際企画推進本部員の竹中 亨教授と石川真由美准教授、事務局から木内行雄国際部長、国際部各課長等関係者が出席し、本学における同事業実施状況の確認、大学の教育・研究環境の国際化に関する今後のビジョン等についてのヒアリングが行われました。

辻理事・副学長、加藤国際交流官からの挨拶の後、辻理事・副学長から、同事業の成果、今後の課題、最終年度の成果目標、本学における国際化の目標とその達成に向けたプロセス等について説明を行い、質疑応答、意見交換が行われました。

その後、本学で受入れている4名の外国人若手研究者との意見交換に移り、本学を選んだ理由、本学の研究環境、日本の大学を国際的に魅力的なものにするための方策等、率直な意見交換が行われました。



さらに、本事業の実施状況にかかる現地視察として、国際企画推進本部及びSupport Office for International Students and Scholarsの視察が行われ、質疑応答も活発に行われるなど有意義なヒアリングとなりました。

今後、同事業実施による、さらなる本学の教育・研究環境の国際化が期待されます。

(国際部国際交流課)

## 社会経済研究所第5回行動経済学研究センターシンポジウム開催

8月27日(水)、『自信過剰を経済学する』をテーマに、社会経済研究所第5回行動経済学研究センターシンポジウムが、大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホールにおいて開催されました。

本シンポジウムは、平成16年に新しい学問分野である行動経済学の現代経済への有用性や魅力を、一般に紹介す

ることを目的として始まりました。「脳科学と経済学との対話」といった、神経経済学の研究成果から、一見経済学とは関係がなさそうな『ダイエット』をキーワードとした経済実験の結果の紹介まで、毎年、様々なテーマのもとに開催しており、学生、研究者から一般の方まで、多くの方々に参加いただけてきました。

第5回目となる今回は、「自信過剰」をキーワードに、競争への参加と多重債務問題についての研究結果について紹介しました。男女による競争への態度、自信過剰の程度の差についての実験結果や、自信過剰による返済不能や取り立ての過小評価が、多重債務に関係することを示す分析結果に、会場がどよめきました。本研究所の大竹文雄教授、経済学研究科の筒井義郎教授の発表の後、本研究所の池田新介教授の司会で、一般参加者を含めてパネルディスカッションが行われました。パネルディスカッションでは次々と質問がだされて、活発な質疑応答が行われました。来場者数は、111名を数え、行動経済学に対する関心の高さが伺われるシンポジウムとなりました。

(社会経済研究所)



## 教職員懇親会開催

毎夏の恒例行事である教職員懇親会が8月28日(木)にアサヒビール株式会社吹田工場ゲストハウスで開催されました。この懇親会には、本学から鷲田清一総長、小泉潤二理事・副学長、高杉英一理事・副学長、門田守人理事・副学長、武田佐知子理事・副学長、辻 毅一郎理事・副学長、月岡英人理事・事務局長、関 順一郎監事の他、名誉教授、退職事務職員及び教職員が、また、アサヒビール株式会社からは高橋正哲専務取締役以下関係者が出席しました。

当日は、高橋専務取締役及び鷲田総長の挨拶に続き、熊谷信昭元総長のご発声による乾杯で懇談会が開始され、今回で第58回目を迎えた教職員懇親会の開催の経緯や逸話の披露、その後抽選会が催されるなど、終始和やかな雰囲気の中、出席者が互いの旧交を温め合い、盛会のうちに終了しました。



高橋専務取締役



鷲田総長



熊谷元総長

(総務部総務課)

## セミナー「科学の出版について考える」(大阪会場)開催

研究者から図書館員まで幅広い方を対象とし、優れた研究成果の発表をテーマとしたセミナーが「科学の出版について考える：インパクトファクターを超えて」と題して開催されました。このセミナーは、NPG Nature Asia-Pacific、トムソン・ロイター、大阪大学附属図書館の共催によるものです。

8月28日(木)に東京工業大学百年記念館(東京会場)で行われた後、一部講師を変えて29日(金)に大阪大学コンベンションセンター(大阪会場)において、74名(22大学・機関)の参加者を迎え行われました。

Nature Materials 編集長の Vincent Dusastre 氏、トムソン・ロイターのアナリストである宮入暢子氏、応用物理学会理事の河野明廣氏、附属図書館の片山俊治課長の4名の講師による、ジャーナルを発行する出版社、ジャーナルの分析を可能にするデータベースのベンダー、論文を出版する研究者、ジャーナルを分析し蔵書構築を実践する図書館という4者の異なる視点からの講演がありました。



セミナー(大阪会場)の様子

参加者からの興味深い質問による活発な質疑応答も行われ、講演者からも反応の良いセミナーだったとの感想を頂きました。

(附属図書館)

## 2008年日韓共同理工学部留学生事業推進フェア開催

8月30日(土)、日韓両国政府の奨学金によって韓国の高  
校卒業生100名程度を日本の国立大学理工系学部を受け入  
れる事業(日韓共同理工学部留学生事業)の推進フェア  
が、韓国ソウルの国立国際教育院で行われました。日本か  
ら29校が参加した同フェアでは、同事業の第10期筆記試  
験合格者150名とその保護者を対象に、日本側の各大学が  
各々の研究・教育の特徴をアピールした。

本学からは、留学生受入部局である工学研究科、理學研  
究科、基礎工学研究科、そして日本語予備教育を担当する  
留学生センターの  
各担当教員、受入  
事務を担当する国  
際部学生交流推進  
課の担当者が参加  
したほか、当日の  
通訳として、本学  
在学中の本事業学



生(3期生1名、5期生1名)が参加し、各研究科の特色  
を熱心に説明しました。このほかにも、8期生2名、本年  
10月から来学予定の9期生5名が応援に駆けつけ、絶え間  
ない本学ブース来訪者への対応に当たり、盛況の裡にフェア  
は終了しました。

(留学生センター、国際部学生交流推進課)

## JSPS-SNSF二国間セミナー開催

JSPS-SNSF 二国間セミナー「Membranomics-Basic and  
Applied Aspect of Biomembrane and Its Mimics」が9月1  
日(月)から3日(水)までの日程で豊中キャンパス・Σホー  
ルで開催されました。本セミナーは、久保井亮一教授(基  
礎工学研究科)とPeter Walde教授(ETH Zurich)が主催  
し、Membrane Stress Biotechnology 研究会(<https://www.cheng.es.osaka-u.ac.jp/kuboilabo/MSB/>)を主催主体として行わ  
れたものです。

従来のGenome、Proteomeとは異なる、先進的なパラ  
ダイムを創出するため、スイス国より7名、日本国内から  
も11名の著名な招待講演者が講演し、また、一般参加者  
も含めて約70名が一同に会し、当該テーマに関する発表・  
討論を行いました。

本セミナーでは、生体膜、そのモデル系であるベシクル  
系や多成分多重層構造の脂質膜システムが潜在的に有する



会場の正面玄関前にて全体写真。



Banquet会場での両国の国旗交換。右から久保井亮一教授  
(阪大、日本代表)とPeter Walde教授(ETH、スイス代表)。

構造・機能に関する情報の総体であるMembranomeに関  
する知の体系化と工学的な応用の可能性について議論され  
ました。セミナーでは、Membranomeとその応用の主要  
な横軸となる(a)X-omeとMembranome(従来ome情報  
との対比)(b)Membrane Stress Response Dynamics(ダ  
イナミックに誘導される膜の潜在機能)(c)Supravesicular  
System(生体膜間情報伝達の解明ならびにセンシング)(d)  
Membrane Process Chemistry(生体膜プロセス化学)の  
セッションに分かれ、招待講演(18件)・一般講演(11件)・  
ポスター発表(27件)が行われました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

## 工学研究科と高知県高岡郡佐川町が連携協力に関する協定締結

工学研究科は、高知県高岡郡佐川町と歴史的文化遺産の活用及び知的・人的資源の交流を図り、文化、教育、産業、まちづくりなどの分野において、両者の発展と充実に寄与することを目的として、連携協力に関する協定を締結しました。

9月2日(火)に工学研究科において調印式が行われ、工学研究科からは馬場章夫研究科長、谷口研二教育研究評議員、池田雅夫社会連携室長、本協定の窓口となったマテリアル生産科学専攻の田中敏宏教授及び長瀬 護事務部長が、佐川町からは榎並谷哲夫町長、橋掛直馬産業高度化技術開発室長が、さらに佐川町と本学との橋渡しに労を執られた山崎伸道先端科学イノベーションセンター教授が出席し、協定書を取り交わしました。

「文教のまち」としてこれまでに産・官・学の分野に多くの優れた人材を輩出している佐川町は、平成20年度から産業高度化技術開発室を開設し、地域の特徴を生かしつつ持続的発展を目指した事業の取り組みを進めています。



榎並谷町長(左) 馬場研究科長(右)

工学研究科との知的・人的資源の交流を通じて、地域活性化につながる産業・社会の構築に貢献できる人材の育成に対して連携協力することが期待されています。

(工学研究科・工学部)

## 近畿地区大学教育研究会第77回研究協議会開催

9月6日(土)文系総合研究棟402講義室において、近畿地区大学教育研究会第77回研究協議会が、大阪大学および近畿地区の大学教職員計84名の参加により開催しました。

当協議会会長代理である京都大学の高橋由典高等教育研究開発推進機構副機構長および当番大学である大阪大学の小泉潤二理事・副学長の挨拶に引き続き、平山弓月京都外国語大学教授より会務の諸報告が行われました。

午前に行われたシンポジウムでは、河合塾の滝 紀子教育研究部長により「どのような入学者に、どのような教育を提供するのか - 今、高校教員や受験生のニーズはどこにあるか -」について講演が行われました。受験生や高校教

師に対するアンケート調査の結果をもとに、大学での1年次教育の重要性、あるいは主体性を持たせる教育プログラムの必要性等が強調され、大学の教育内容の改善に大きな示唆を与える発表となりました。

午後からは2つの部会に分かれて協議が行われました。

第1部会では「大学の“カリキュラムポリシー”を考える」というテーマの下で以下の3つの発表が行われました。京都外国語大学の小野隆啓教授は「英語を基軸としての二言語同時学習」、京都精華大学の野口勝三准教授は「対話関係を中核とした授業実践 - 日本語リテラシー授業の報告 -」、大阪大学大学教育実践センターの山成数明教授は「大阪大学の基礎セミナーの特質」の題目の下各発表を行い、基礎ゼミや対話型の少人数教育等の実践報告が行われました。引き続いて行われた全体討論では、教養型ゼミと専門型ゼミの各妥当性の問題や日本語リテラシーの低下に対応するカリキュラム等について論議されました。

第2部会では「大学職員による教育支援の現状と課題」について、大学教育実践センターの小田雅博事務長を座長として協議されました。ここでは、学生の多様化に即した教育支援の現状について討議がなされ、職員の役割が変化しつつあり、職員の意識の改革が必要であることや教員・職員の今以上の連携が必要であることなどが確認されました。

(大学教育実践センター)



## 全学ファカルティ・ディベロップメント研修実施

9月9日(火)、19日(金)の2日間にわたり平成20年度ファカルティ・ディベロップメント研修を実施しました。本研修は、教員の教育指導能力の向上を図り、質の高い教育活動の維持を目的として、平成19年度から全学的に実施しているもので、今回は受講対象者を昨年度の「助教」から「全教員」に拡大して、吹田地区はコンベンションセンター MO ホールで、豊中地区は大学教育実践センターイ講堂の2会場で開催し、2日間で341名の参加がありました。研修は、大阪大学の教育改革、カルト問題等キャンパスライフにおける諸問題、学生のメンタルヘルス支援における



講演する東京大学山本教授



講演する岩手大学玉副学長

ポイント等の講話、大阪大学共通教育賞受賞者の授業での様々な工夫等の事例紹介の他、東京大学の山本 泰教授および岩手大学の玉 真之介理事・副学長から、それぞれ各大学におけるFDの取り組み事例の紹介が行われ、参加者は熱心に聴講し、質疑応答では活発な意見交換が行われました。

(学生部学務課)

## 平成20年度大阪大学係長研修実施

平成20年度大阪大学係長研修が、9月17日(水)から19日(金)までの3日間にわたり、コンベンションセンターを会場として行われました。

本研修は、係長及び係長相当の職にある者を対象として、その職務遂行に必要な基本的・一般的知識の修得、監督者としての能力及び識見を確立、および大学行政の管理運営の重要な担い手としての職員の資質の向上を図ることを目的として実施されたものであり、本年度は他機関への出向者(10機関18名)を含む48名が受講しました。



月岡理事・事務局長の挨拶



月岡英人理事・事務局長による開講式挨拶のあと、外部の研修講師による講義・演習により研修が進められました。

研修は、マネジメントなどについての講義に続いて、PBI(職業行動調査)による自己診断などが行われ、その後に行われた、「組織協力ゲーム」、「課長インバスケッ」、「分析発表演習」などのビジネスシュミレーションにおいては、グループ討議や発表などを通じて活発な意見交換が行われました。

受講生全員が意欲的に課題に取り組み、所定の課程を修了しました。

(総務部人事課)

## 理学研究科FD講演会(第9回メンタルヘルス講演会)開催

理学研究科では、9月24日(水)に、理学部の教職員を対象としたFD(ファカルティ・ディベロップメント)の一環として、保健センターとの共催で「学生のメンタルヘルス支援について 教職員のための講演会」(第9回メンタルヘルス講演会)を開催しました。参加者は、70名(内理学部外3部局14名)でした。

東島 清研究科長の挨拶の後、井上洋一保健センター学生相談室長の「阪大メンタルヘルスの現状について」と題する基礎講演、河本敏男京都博愛会病院臨床心理士の「理科系学生のオカルト親和性について」と題する講演が行われました。

「阪大メンタルヘルスの現状について」では、学生相談室に訪れる学生数や内容の最近の統計データが示され、少子化や学生の気質の変化との関係の分析が行われました。また、最近症例が増え問題視されているアスペルガー症候群など発達障害を話題に取り上げ、その特徴や学生と接する場合の注意などが説明され、大学側によるメンタルヘルスケアへの体制をいっそう整備し、教職員のさらなる理解が必要と指摘されました。

後半の「理科系学生のオカルト親和性について」では、



最近話題になっている二セ科学商法やスピリチュアープームを話題に取り上げ、前者は科学的教育が回避に有効であるが、後者は必ずしも有効でなく、オカルト親和性を増す要因になる可能性を指摘されました。

各講演の後、出席した教員からの質問等活発な意見交換が行われ、予定の時間を超えて盛況のうちに終了しました。

(理学研究科・理学部)

## 理学研究科・理学部環境美化実施

理学研究科・理学部では、例年実施している学内環境美化の一環として、今年も9月25日(木)に理学研究科周辺の清掃を実施しました。多数の教職員・学生の参加があり、用意した350人分の軍手やゴミ袋が瞬く間になくなりました。



美化活動を行う東島 清研究科長(左)

当日は、曇天で少し肌寒い中、多数の教職員、大学院学生、学部学生及び外国人留学生等総勢約400名が一体となって約1時間にわたり、理学研究科・理学部構内を中心に豊中地区正門、大高の森付近の清掃区域で、空き缶、空き瓶、ペットボトル、タバコの吸い殻等のゴミ拾い及び除草作業等に精を出し、付近一帯が見違えるように綺麗になりました。

この清掃作業は、日頃忘れがちな環境美化に対する意識を再認識するとともに、教職員・学生が快適なキャンパスライフを送れるよう、美化意識の高揚を図ることを目的として行っているものです。

作業終了後はお茶を飲みながら歓談し、平素は教育研究の繁多にまかせてお互いに話す機会の少ない教職員、学生のコミュニケーションを深める場としても大いに役立ちました。

(理学研究科・理学部)

## 大学院学位記授与式総長式辞

本日ここに修士／博士の学位を得、授与式を迎えられたみなさんに対し、まずは心よりお祝いを申し上げます。また、幼少の頃からこの日まで、みなさんの勉学を支えてこられたご家族の方々の長きにわたるご苦労に対しても、心より敬意を表したく存じます。

これから企業や、民間の研究所、あるいはシンクタンクに活動の場を移される方もおられれば、さらに大学で研究を続けられる方もおられますが、それぞれに本学で培った知恵と知識と技能を存分に発揮されてゆかれることを、心より願っております。

さて、みなさんは専門的な研究の最初の一つを究め、ここに学位を得られました。

一つのことをとことん突きつめ、考えぬくという経験を一度しておけば、その後いろんな局面で的確な判断が可能になります。わたしの専門は西洋哲学とその歴史ですが、学生諸君にはつねづね、ある哲学者の思想について博士論文を書くときには、その哲学者の書き物を、著作や論文から随想やメモ、手紙の類まで、すべて読むように求めてきました。すぐれた哲学者、思想家といわれるひとは、人類が直面するあらゆる問題を問題としてそれなりに引き受け、なんらかのかたちでそれへの視点を提示するという責務を果たしてきたからです。

そのようにして一人の哲学者の思考の全貌をとりあえず捉えておけば、そのあと別の哲学者の「格」をきちんと測ることができるようになります。歴史や社会についての考え方、時間や空間についての考え方などそれぞれの問題について、自分が集中的に読み、解釈してきた哲学者の議論と比較をすることができ、それよりさらに深い議論をしているか、あるいは自分がなじんでいる哲学者の議論の手前のところで論が終わっているか、そういうことが見えてきて、その哲学者の「格」を判断することができるようになります。つまり、何か一つの思想を究めておけば、以後それが別の思想を評価するときの基準としてはたらくわけです。

もっと日常的な例を見てみましょう。

幼児が鉛筆で字を書くことを覚え、身につけるまでは、相当な時間を要します。一つの字をすらすら書くようになるまでには、字を左右逆に書いたり、線を一本抜かせたりします。けれども、いったんたとえば平仮名の「あ」を書けるようになれば、先生に黒板に大きく書くよう求められて、即座に「あ」と書くことができます。これはとても不思議なことで、黒板に字を書くときは鉛筆で字を書くときとは異なる筋肉を使うはずなのに、字を書くためにそれまで一度も使ったことのない筋肉を使って、練習なしにいきなり黒板に字を書くことができるのです。校庭に出て、足で「あ」の字を書きなさいと言われても、足でその字をす



ぐに書くことができます。この場合は鉛筆で書くときとはさらにもっと異なる筋肉を使うのに、です。これは字を書くという身体の体制、心理学者は「身体図式」と呼びますが、それを身体のある部位にいったん住まわせたなら、あとはそれを身体の中のどの部位にでも転移させて、発動させることができるということなのです。そういう転移というか変換の一般的な可能性が「身体図式」にはあります。つまり、みなさんはそれぞれの研究領域で、そういう「図式」を身につけられたと言ってもよいのです。これは何にも代え難い知性の一つの達成であります。

このことをまず祝福させていただいたうえで、いま一つ、みなさんに強く求めたいことがあります。それは広い裾野をもった教養を同時に身につけておいていただきたいということです。「広い裾野をもった教養」といえば、なにか専門の一つを究めるということの反対にも聞こえるかもしれませんが、しかし、専門を究めるということと幅広い教養を身につけておくということとは対立することではなく、むしろ両者をともに併せもつことがなければ、専門研究も教養もともに意味をもたないということなのです。

一つ例を挙げておきましょう。大阪大学にはコミュニケーションデザイン・センターという、大学院の共通教育を担う機関があります。ここで一昨年、科学技術コミュニケーションの集中講義がなされ、いわゆるBSE（牛海綿状脳症）問題が取り上げられました。そして「米国産の牛肉の輸入を再開するためにはどのような条件を付する必要があるか」という問題について、ディスカッションがなされました。受講者は、医歯薬系から理工学系、人文・社会科学系と、多様な研究領域に属する大学院生でした。

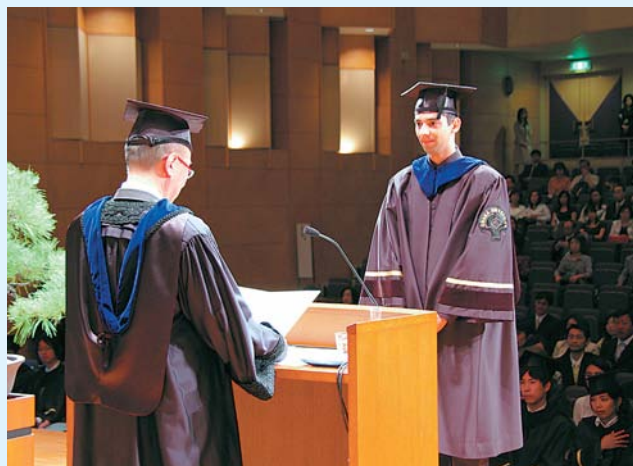
まずは医学系の学生が、BSEの発症メカニズムについて疫学的な視点から得々と説明をしました。これに対して、法学系の学生が、牛肉の輸入再開の是非についてはたんなる疫学的説明ではまったく不十分で、日米の貿易摩擦や政治外交上の入り組んだ諸問題を視野に入れなければ解決しないと反論しました。それに対してこんどは人文系の学生がさらに、肉骨粉を飼料にするというかたちで牛にカニバ

リズムを強いるという現代の畜産のあり方について、さらにそこから動物を家畜として育てそれを食するという何千年の牧畜文明のあり方について論じなければ、議論は表層的なものにしかならないと批判しました。

これは大変に興味深いディスカッションでした。一つの問題を論じるにも、思いも寄らない別の視点がありうる、つまり問題はつねに多角的な視点から論じられねばならないということを、参加者のみなが痛感したのです。そして、問題の複雑性の増大に耐えられるだけの知性をもつこと、つまりは知性に長い潜水に耐えられるに十分な肺活量があることの重要さに気づいたのです。

こうした議論を一人の人間が一人でできるとき、その人には教養があるといえます。教養とは、一つの問題に対して必要ないくつもの思考の補助線を立てることができるということです。いいかえると、問題を複眼で見ること、いくつかの異なる視点から問題を照射することができるということです。このことによって、ひとの知性はより客観的なものになります。わたしたちの知性がそのように複眼的になるためには、常日頃から、自分の関心とはさしあたって接点のない思考や表現にふれるよう心懸けていることがなにより大切です。わたしが先に「広い視野」といったのも、そういうことです。

科学あるいは技術の専門家としてみずからを磨いてこられたみなさんに、なんとしても身につけていただきたいのは、この幅広くて深い教養とそれにもとづく判断力です。それは、いいかえると、専門家としての自分の研究や活動を、現実の社会のなかにきちんとマッピングできるということでもあります。みなさんには、この社会において何がほんとうに大事なことであるかという判断、つまりはものごとの軽重の判断という、より大きな文脈のなかにみずからの専門的な知識や技能を置きなおしたうえで、専門家としての活動を進めていただきたいと思います。一つの領域の専門家は別の領域ではアマチュアでしかありません。そのアマチュアの視点から自己の専門を相対化する眼を養ってもらいたいのです。



大阪大学は、みなさんご存じのように、「教養、デザイン力、国際性の涵養」ということを全学的な教育目標に掲げています。とりわけ教養については、専門課程に進む前だけではなく、高学年になればなるほどより不可欠になると考え、大学院に幅広い教養を身につけるための共通教育を導入しているのですが、開始して三年、まだ各研究科のカリキュラムのなかに、さきほど紹介したようなコミュニケーションデザイン・センターにおける研究科横断型のゼミが十分に採り入れられていないことを、きわめて無念に思っております。みなさんにはどうかこういう方向での教養教育を、今後みずからに課していただきたいと思います。

さて、最後にもう一言述べさせていただきますと、大阪大学はその研究の精神として、次の三つを掲げることになりました。ことしの「総長年頭所感」ではじめて呼びかけたものですので、まだ全学に浸透しているとはいえませんが、そのなかでわたしは本学における研究の精神として、「基礎」と「ときめき」と「責任」とを掲げています。英語でいえば、研究において basic で exciting で responsible でいようという提案です。「基礎」とは、つねにベーシックな研究に根を下ろした研究をおこなうということであり、「ときめき」とは「面白くてたまらない」「わくわく・どきどきする」ようなイクサイティングな研究に没頭するということであり、「責任」とはみずからの研究が（プラスであれマイナスであれ）社会的にどのような意味を担っているのかについての意識を強くもつということです。

この最後の「責任」ということに関していえば、明治時代の終わり、1911年に大阪毎日新聞慈善団が発足した折り、当時の毎日新聞社長であった本山彦一が語ったこんな言葉を思い出します。本山は言いました。「一本の指のうずきは、同時に、全身の苦痛である。社会の一隅に、生活に疲れ、病に苦しむ者の存することは、すなわち、社会全体の悩みでなければならない」と。この言葉とともにみなさんに訴えたいのは、社会のいかなる困難な問題もみずからの問題として受けとめるそのような視界のなかに、みずからの専門研究を置いておいていただきたいということです。そしてそのことによって、「大阪大学の大学院を修了した学生は一味違う」と言ってもらえるような研究者もしくは企業人になってほしいということです。わが国のこれからを背負ってゆく世代であるみなさんに、わたしは以上の点を強く願うものです。

最後になりましたが、みなさんお一人お一人がこれからの長い生涯、幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたしの式辞といたします。

## 第47回全国七大学総合体育大会得点表

Seven Universities Movement! Hokkaido , Tohoku , Tokyo , Nagoya , Kyoto , Osaka , Kyusyu



| 競技名      |    | 参加<br>校数 | 北海道大学  |    | 東北大学 |    | 東京大学  |     | 名古屋大学  |     | 京都大学 |    | 大阪大学   |    | 九州大学 |     |
|----------|----|----------|--------|----|------|----|-------|-----|--------|-----|------|----|--------|----|------|-----|
|          |    |          | 順位     | 得点 | 順位   | 得点 | 順位    | 得点  | 順位     | 得点  | 順位   | 得点 | 順位     | 得点 | 順位   | 得点  |
| アイスホッケー  |    | 7        | 2      | 8  | 1    | 10 | 5     | 3   | 6      | 2   | 4    | 4  | 3      | 6  | 7    | 1   |
| 航空       |    | 6        | 5      | 3  | 不参加  |    | 4     | 4   | 1      | 10  | 2    | 8  | 6      | 2  | 3    | 6   |
| スキー      |    | 5        | 不参加    |    | 不参加  |    | 1     | 10  | 3      | 6   | 5    | 3  | 2      | 8  | 4    | 4   |
| 馬術       |    | 6        | 4      | 3  | 1    | 8  | 2     | 6   | 不参加    |     | 3    | 4  | 該当団体なし |    | 5    | 2   |
| アーチェリー   |    | 7        | 7      | 1  | 2    | 8  | 5     | 3   | 4      | 4   | 6    | 2  | 1      | 10 | 3    | 6   |
| 空手道      | 男子 | 7        | 5      | 3  | 3    | 6  | 1     | 10  | 7      | 1   | 2    | 8  | 4      | 4  | 6    | 2   |
|          | 女子 | 7        | 5      |    | 5    |    | 1     |     | 5      |     | 4    |    | 3      |    | 2    |     |
| 弓道       | 男子 | 7        | 2      | 8  | 1    | 10 | 3     | 6   | 6      | 2   | 4    | 4  | 7      | 1  | 5    | 3   |
|          | 女子 | 7        | 2      | 8  | 1    | 10 | 7     | 1   | 6      | 2   | 4    | 4  | 5      | 3  | 3    | 6   |
| 剣道       | 男子 | 7        | 1      | 10 | 2    | 8  | 4     | 4   | 5      | 3   | 6    | 2  | 7      | 1  | 3    | 6   |
|          | 女子 | 7        | 5      | 3  | 4    | 4  | 2     | 8   | 6      | 2   | 7    | 1  | 3      | 6  | 1    | 10  |
| 硬式庭球     | 男子 | 7        | 7      | 1  | 3    | 6  | 4     | 4   | 2      | 8   | 1    | 10 | 5      | 3  | 6    | 2   |
|          | 女子 | 7        | 4      | 4  | 1    | 10 | 3     | 6   | 2      | 8   | 6    | 2  | 5      | 3  | 7    | 1   |
| 硬式野球     |    | 5        | 5      | 3  | 2    | 8  | 不参加   |     | 4      | 4   | 不参加  |    | 3      | 6  | 1    | 10  |
| ゴルフ      |    | 7        | 3      | 6  | 4    | 4  | 5     | 3   | 2      | 8   | 1    | 10 | 6      | 2  | 7    | 1   |
| 自動車      |    | 7        | 3      | 6  | 2    | 8  | 6     | 2   | 4      | 4   | 5    | 3  | 1      | 10 | 7    | 1   |
| 柔道       |    | 7        | 5      | 3  | 1    | 10 | 2     | 8   | 6      | 1.5 | 3    | 5  | 3      | 5  | 6    | 1.5 |
| 準硬式野球    |    | 6        | 3      | 6  | 4    | 4  | 5     | 3   | 1      | 10  | 2    | 8  | 6      | 2  | 不参加  |     |
| 少林寺拳法    |    | 7        | 4      | 4  | 2    | 8  | 5     | 3   | 7      | 1   | 3    | 6  | 1      | 10 | 6    | 2   |
| 水泳       | 男子 | 7        | 6      | 2  | 4    | 4  | 7     | 1   | 2      | 8   | 3    | 6  | 1      | 10 | 5    | 3   |
|          | 女子 | 7        | 4      | 4  | 5    | 3  | 3     | 6   | 6      | 2   | 2    | 8  | 1      | 10 | 7    | 1   |
| 相撲       |    | 7        | 6      |    | 1    |    | 3     |     | 2      |     | 4    |    | 7      |    | 4    |     |
| ソフトテニス   | 男子 | 7        | 5      | 3  | 6    | 2  | 7     | 1   | 3      | 6   | 4    | 4  | 2      | 8  | 1    | 10  |
|          | 女子 | 5        | 1      | 10 | 不参加  |    | 不参加   |     | 3      | 6   | 4    | 4  | 2      | 8  | 5    | 3   |
| ソフトボール   |    | 6        | 該当団体なし |    | 5    | 2  | 3     | 4   | 2      | 6   | 4    | 3  | 1      | 8  | 6    | 1   |
| 体操       |    | 7        | 1      | 10 | 5    | 3  | 3     | 6   | 4      | 4   | 6    | 2  | 2      | 8  | 7    | 1   |
| 卓球       | 男子 | 7        | 2      | 8  | 1    | 10 | 6     | 2   | 3      | 6   | 5    | 3  | 4      | 4  | 7    | 1   |
|          | 女子 | 7        | 4      | 4  | 3    | 6  | 6     | 2   | 2      | 8   | 7    | 1  | 1      | 10 | 5    | 3   |
| バスケットボール | 男子 | 7        | 3      | 6  | 6    | 2  | 1     | 10  | 2      | 8   | 5    | 3  | 4      | 4  | 7    | 1   |
|          | 女子 | 7        | 4      | 4  | 1    | 10 | 7     | 1   | 3      | 6   | 2    | 8  | 6      | 2  | 5    | 3   |
| バドミントン   | 男子 | 7        | 2      | 8  | 6    | 2  | 4     | 4   | 7      | 1   | 5    | 3  | 3      | 6  | 1    | 10  |
|          | 女子 | 7        | 1      | 10 | 2    | 8  | 6     | 2   | 3      | 6   | 7    | 1  | 5      | 3  | 4    | 4   |
| バレーボール   | 男子 | 7        | 4      | 4  | 7    | 1  | 2     | 8   | 1      | 10  | 3    | 6  | 5      | 3  | 6    | 2   |
|          | 女子 | 7        | 7      | 1  | 4    | 4  | 6     | 2   | 5      | 3   | 1    | 10 | 2      | 8  | 3    | 6   |
| ハンドボール   |    | 7        | 7      | 1  | 2    | 8  | 4     | 4   | 1      | 10  | 5    | 3  | 6      | 2  | 3    | 6   |
| フェンシング   |    | 6        | 5      | 2  | 2    | 6  | 3     | 4   | 該当団体なし |     | 1    | 8  | 4      | 3  | 6    | 1   |
| ヨット      |    | 7        | 5      | 3  | 6    | 2  | 3     | 6   | 7      | 1   | 4    | 4  | 2      | 8  | 1    | 10  |
| ラクロス     | 男子 | 7        | 3      | 6  | 7    | 1  | 2     | 8   | 6      | 2   | 4    | 4  | 1      | 10 | 5    | 3   |
|          | 女子 | 5        | 不参加    |    | 2    | 8  | 1     | 10  | 不参加    |     | 3    | 6  | 4      | 4  | 5    | 3   |
| 陸上競技     | 男子 | 7        | 5      | 3  | 1    | 10 | 6     | 2   | 4      | 4   | 2    | 8  | 3      | 6  | 7    | 1   |
|          | 女子 | 7        | 1      | 10 | 7    | 1  | 4     | 3.5 | 2      | 8   | 6    | 2  | 3      | 6  | 4    | 3.5 |
| 総 得 点    |    |          | 179    |    | 215  |    | 170.5 |     | 181.5  |     | 181  |    | 213    |    | 141  |     |
| 順 位      |    |          | 5 位    |    | 1 位  |    | 6 位   |     | 3 位    |     | 4 位  |    | 2 位    |    | 7 位  |     |

得点表

|     |    |   |   |   |
|-----|----|---|---|---|
| 大学数 | 7  | 6 | 5 | 4 |
| 1 位 | 10 | 8 | 6 | 4 |
| 2 位 | 8  | 6 | 4 | 3 |
| 3 位 | 6  | 4 | 3 | 2 |
| 4 位 | 4  | 3 | 2 | 1 |
| 5 位 | 3  | 2 | 1 |   |
| 6 位 | 2  | 1 |   |   |
| 7 位 | 1  |   |   |   |

- ・オープン種目（空手道女子、相撲）は総合得点に加味されない
- ・大学数とは当該競技を行う団体が存在する数を指す。
- ・参加校数とは実際に七大学戦に参加した大学数を指す。

七大学戦公式ホームページ <http://www.7-u.jp/>

## 野村正勝名誉教授の「Festschrift(記念論文集)」が国際誌から刊行

平成 16 年 3 月に本学工学研究科を退官した野村正勝名誉教授の Festschrift (記念論文集) が、エネルギー関連の国際誌「Fuel Processing Technology (Elsevier)」から “Special issue in honor of Professor Masakatsu Nomura (特別号)” として 2008 年 4 月に刊行されました。Festschrift は同僚や教え子などによる記念論文集で、ペンシルバニア州立大学の Chunshan Song 教授と京都大学の三浦孝一教授が招待エディターとなっています。炭化水素類エネルギー関連では、国際誌としてこのほか「Fuel」や「Energy & Fuels」がありますが、こうした企画はこの分野では初めてです。

この記念号に論文を寄せたのは「Energy & Fuels」初代編集長であるリーハイ大学の John W. Larsen 教授、ペンシルバニア州立大学の Harold Schobert 教授、「Energy & Fuels」



記念論文集を手にした野村名誉教授

現編集長であるデラウエア大学の Michael T. Klein 教授、ピッツバーグ大学の Badie Morsi 教授、中国科学院石炭化学研究所の Baoqing Li 教授、京都大学の三浦孝一教授、東北大学の大塚康夫教授、富山大学の椿範立教授などの研究仲間です。同窓からは北陸先端科学技術大学院大学の三宅幹夫教授、ペンシルバニア州立大学の Chunshan Song 教授、イズミール工科大学(トルコ)の Levent Artok 教授、本学の三浦雅博教授、ワイオミング大学の Maohong Fan 准教授、大阪大学の佐藤哲也准教授、富山大学の米山嘉治准教授、富山大学の村田聡准教授、産業技術総合研究所の貴傳名甲博士で、計 23 編の最新の論文が収められています。

記念号の冒頭でエディターの Song 教授と三浦教授が野村名誉教授の経歴を詳細に記すとともに、計 256 篇の論文と著書、総説、解説、座談会などのタイトル、年号を記し、その業績を紹介しています。寄稿された論文の内容は、ケロジェンの化学、褐炭の改質、重質炭化水素の精密分析、石炭の膨潤、石炭基盤のジェット燃料、水素貯蔵、ナノカーボン、計算機による反応解析、反応器の設計、フィッシャー・トロプシュ合成、脱硫、脱窒素など、重質炭化水素変換に関わる多岐の分野にわたっており、業績に相応しい特別記念号になっています。なお、この号には野村名誉教授の現役最後の業績も含まれており、石炭化学構造研究の新たな段階に向けて重要指針を与える新考察がなされています。

(工学研究科・工学部)

## 南部陽一郎招へい教授「ノーベル物理学賞」受賞

10月7日(火)スウェーデン王立科学アカデミーより、本学招へい教授(理学研究科)南部陽一郎シカゴ大学名誉教授のノーベル物理学賞授与が発表されました。

南部先生のこの度の受賞を心よりお慶び申し上げます。

なお、本学は南部先生に対し平成7年に最初の大阪大学名誉博士の称号を授与しており、現在、理学研究科の招へい教授としてお迎えしております。



## 谷口直之寄附研究部門教授「IUBMB (国際生化学分子生物学連合)メダル」授与

6月28日(土)から7月3日(木)までギリシャのアテネで行われた第33<sup>th</sup> FEBS Congress / 11<sup>th</sup> IUBMB Conference で、糖鎖科学の領域、特に病気におけるN-結合型糖鎖についてパイオニア的な研究に対して、微生物病研究所の谷口直之寄附研究部門教授がIUBMB (国際生化学分子生物学連合)メダルを授与されました。

IUBMB (国際生化学分子生物学連合)は、生化学と分子生物学の発展と進歩を促進し支援することを使命に掲げ、1949年に設立され、現在、世界5大陸の74カ国に属する49の加盟団体と25の準加盟団体からなるグローバルな組織体です。

IUBMBメダルは、生化学分子生物学の領域で卓越した業績を上げた研究者に授与されるもので、アメリカとドイツの2人の研究者に次いで3人目の授与となりました。7月1日(火)にIUBMB会長のAngelo Azzi博士から、業績などの紹介の後、谷口教授は“N-結合型糖鎖の病気における分子生化学ネットワーク”と題して1時間の特別講演を行い、その後、IUBMBメダルとCertificateとアテネにふさわしい月桂樹の楯が授与されました。

メダルにはアイザックニュートンなどが好んだ、科学は先人の積み重ねによっているという比喩的な言葉、「巨人の肩にたつとより遠くが見渡せた」がラテン語で刻印されています。

(微生物病研究所)



## 平尾俊一教授「Award for Outstanding Achievements in Bioorganometallic Chemistry」及び「Vanadis Award」受賞

工学研究科応用化学専攻の平尾俊一教授が、Award for Outstanding Achievements in Bioorganometallic Chemistry 及び Vanadis Award を受賞しました。

Award for Outstanding Achievements in Bioorganometallic Chemistry は、生物有機金属化学の分野で国際的に顕著な業績を挙げた研究者に贈られる国際賞であり、出版社の Elsevier のサポートを受けています。平尾教授は、生物有機金属化学の分野で、有機金属化合物とオリゴペプチドまたは核酸塩基とのハイブリッドなシステムを設計・合成し、その有用性を明らかにすることで先駆的な研究を展開してきました。前者の研究では、最小限のペプチド鎖により生体系で見られるような高次立体構造を可能にするとともに、有機化学的にも有用な不斉組織場を構築しました。後者の研究でも、核酸塩基を用い機能的な有機金属レドックス場を可能にしました。

また、Vanadis Award は、生体必須元素であり材料的にも重要であるバナジウムに関する科学の分野で、国際的に顕著な業績を挙げた研究者に贈られる国際賞です。賞の名前はバナジウム元素の命名のもとになったスカンジナビアの神話にでてくる美の女神バナジスにちなんで名づけられました。平尾教授は、有機合成化学や錯体化学の分野で、バナジウム元素の特性を駆使したレドックス反応を開発するとともに、バナジウムの d 軌道と有機化合物の  $\pi$  軌道のハイブリッド化に成功し、バナジウム科学を超えた先駆的な研究を展開してきました。前者の研究では、触媒的一電子還元手法や従来にない酸化的カップリング法などの合成方法論を明らかにするとともに、生体系に学ぶ環境調和型触媒系を可能にしました。また、後者の研究では、有用な機能性電子材料を開発しました。

これらの研究は独創的であるとともに国際的に注目を浴び、それぞれの分野の研究を先導してきたと評価されたものです。いずれの賞も、日本人として初めての受賞となります。

Award for Outstanding Achievements in Bioorganometallic Chemistry の授賞式は、7月8日(火)米国のモンタナ州ミズーラで開催された第4回国際生物有機金属化学シンポジウムで、また、Vanadis Award の授賞式は7月19日(土)ポルトガルのリスボンで開催された第6回国際バナジウム化学・生物化学シンポジウムにて催されました。両賞とも、授賞式に続き、平尾教授による受賞講演が行われました。

(工学研究科・工学部)



Award for Outstanding Achievements in Bioorganometallic Chemistry授賞式



Vanadis Award 授賞式

## 福井希一教授「日本イーラーニング大賞:文部科学大臣賞」受賞

工学研究科生命先端工学専攻の福井希一教授が、第5回イーラーニング大賞文部科学大臣賞を、関係者を代表して受賞しました。本賞は1次から3次にわたる審査を経てイーラーニングの教材開発、普及、実践等において卓越した業績を上げた団体に授与されるものです。

今回は、工学研究科等が中心となって進めてきた現代GPプログラムおよび教育・研究等推進重点経費での取組みである、「先端科学リテラシーとグローバルコンピテンシーを有する人材養成：専門英語eラーニング教材の開発と教育実践」が、先端技術分野における学生の英語力向上のため、学内の英語専門教員と先端技術分野の教員がともに参画し、イーラーニング教材を制作した点、および高等教育、特に専門分野における英語教育の改革に貢献し、科学技術立国を目指すわが国のグローバルな技術者育成を促進した点、が高く評価されました。

授賞は、東京ビッグサイトで開催されたイーラーニングワールド2008の開催期間中である7月30日(水)の授賞式席上で行なわれ、賞状および副賞が授与されました。

(工学研究科・工学部)



## 望月正人准教授「米国機械学会 最優秀会議企画・貢献 特別賞」受賞

工学研究科の望月正人准教授が、米国機械学会(American Society of Mechanical Engineers: ASME)から、「最優秀会議企画・貢献 特別賞」を受賞しました。

この賞は、「ASME規格」のお膝元である米国機械学会の圧力容器および配管部門での国際的アクティビティにおいて、顕著な貢献を果たした個人に毎年1件以内が授与されるものです。ASME規格は、世界で最も古くから策定されてきた規格の一つであり、現在も当該分野では事実上の国際規格として用いられているもので、グローバルスタンダードの流れの中でも重要な、また、規格戦略上のトップランナーとして他の産業分野からも注目されている規格です。

今回の受賞理由として、以前から構造物の寿命・破壊事故に対する大きな重要性が指摘されながらも、実機レベルでは未解明であった溶接部の残留応力について、実測方法、及び数値解析方法ともに定量的予測手段を確立するとともに、製品の高経年化対策への寄与や最適設計施工保守評価(Fitness-for-Service)への残留応力分布の定量的導入の先鞭を果たしたこと、それらの学問分野を学会の中で大きな流れとして会議企画に貢献したこと、があげられます。

授賞式は7月30日(水)に米国・シカゴで行われた同学会の年次講演会の昼食会の席上で行われました。

(工学研究科・工学部)



望月准教授(中央)

## 「環境リスク管理のための人材養成」プログラム 「第12回工学教育賞(文部科学大臣賞)」受賞

工学研究科で受託している文部科学省振興調整費振興分野人材養成「環境リスク管理のための人材養成プログラム(2004～2008年度)(研究代表：盛岡通教授)」による「環境リスク管理に関する教学の体系化におけるフロンティア活動」が、日本工学教育協会より、第12回(平成19年度)工学教育賞(文部科学大臣賞)を受賞しました。

日本工学教育協会は、工学教育の振興をはかり、産業の発展に寄与することを目的として設立された協会で、工学教育賞(文部科学大臣賞)は、先導的、革新的試みによって工学教育の発展に多大の刺激と貢献を与えた波及性に富んだ業績に対して年間1件まで贈呈されることとなっています。

本プログラムの特徴である、(1)大学院生と社会人が同じ教室で学んでおり、相乗効果を高めていること、(2)演習形式の講義において講師と社会人と大学院生の三者が協働で「リスク学教育コンテンツの共同開発」を推進していること、(3)修了生は「リスクマネジャ」として日本リスク研究学会に個人登録され公表され修了生のキャリアデザインを支援していること、などが高く評価されました。

文部科学省からの委託事業は2008年度で終了しますが、工学研究科附属サステナビリティ・デザイン・オンサイト研究センターが、継続して教育活動を発展させていきます。

授賞式は、8月1日(金)、神戸大学で開催された第56回工学・工学教育研究講演会で行われ、賞状とトロフィーが授与された後、環境・エネルギー工学専攻の東海明宏教授が受賞スピーチを行いました。

(工学研究科・工学部)



## 工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻 「日本工学教育協会賞 業績賞」受賞

工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻が、日本工学教育協会の「2007年度日本工学教育協会賞 業績賞」を受賞しました(受賞者：座古 勝名誉教授、鳴海邦碩名誉教授、佐藤武彦教授、山本孝夫教授、上西啓介教授、倉敷哲生准教授、加賀有津子准教授、松村暢彦准教授、村田雅人准教授、清野智史講師、中川 貴准教授)。

本賞は、工学・工業教育の発展を奨励することを目的とし、優秀な工学教育、工業教育ならびに技術教育等の分野において、効果的な業績をあげた個人ならびに団体に与えられる賞です。今回の業績賞は、ビジネスエンジニアリング専攻における「持続的自己啓発のためのOJE法による新たな実践型演習の取り組み」が高く評価されて授与されたものです。外的動機付けから始め、学習過程で内的動機付けに変わる知識修得に重点を置いた教育手法であり、目的意識や技術融合やそのマネジメントを教育し、自らが目標を生み出して実行し、学んだ内容を元に議論する能力を効果的に伸ばすことを特徴としています。

授賞式は、8月1日(金)～3日(土)に神戸大学にて開催された「日本工学教育協会第56回年次大会」における開会式/表彰式席上で行われ、賞状および記念像が授与されました。

(工学研究科・工学部)



## 別所貞雄君、杉田尚基君「第2回三菱レイヨン奨学金」授与

平成19年度から創設された三菱レイヨン株式会社からの奨学寄附金に基づく第2回三菱レイヨン奨学金授与式が、三菱レイヨン社の関係者、基礎工学研究科の研究科長、副研究科長、選考委員会委員等の関係教員、奨学生等が出席のもと、8月8日(金)に基礎工学研究科において執り行われました。

この奨学金は、大学院博士前期課程に入学した学生で、優秀な学業成績をおさめ、前向きで意欲的な姿勢を持つ人物を対象に本研究科の選考委員会において、奨学生が選考され、2年間奨学金が授与されるものです。

栄えある第2回奨学金受賞者は、下記の2名で、三菱レイヨン株式会社中内シニアフェローから奨学金の盾を、研究科長から奨学金証書を授与されました。

両君の栄誉を称え、今後の活躍を期待いたします。

第2回三菱レイヨン奨学生

- ・機能創成専攻 博士前期課程 1年次 別所 貞雄
  - ・システム創成専攻 博士前期課程 1年次 杉田 尚基
- (基礎工学研究科・基礎工学部)



別所君、杉田君を囲んで、  
三菱レイヨン社関係者と本研究科関係者

## 山中伸介教授、黒崎 健助教、牟田浩明助教 「第2回日本熱電学会欧文論文賞」受賞

工学研究科の山中伸介教授、黒崎 健助教、牟田浩明助教のグループが、第2回日本熱電学会欧文論文賞を受賞しました。

山中教授らのグループは、ドイツ航空宇宙局で開発されたスキャンニングゼーベックマイクロプローブを用いて、各種熱電材料のサブミリ領域におけるゼーベック係数の二次元分布の観察を試みました。その結果、X線回折測定や電子顕微鏡観察といった手法では一見均一にみえている試料でも、実際にはほんの僅かの組成の不均一性が存在し、それが試料のゼーベック係数に多大な影響をあたえていることを見出しました。そしてこの結果をもとに、高性能熱電材料を開発するためには、組成の均一性が大変重要であることを結論づけました。今回の受賞は、その功績が評価されたものです。

授賞式は、8月21日(木)から22日(金)にかけて早稲田大学にて開催された第5回日本熱電学会学術講演会において行われ、賞状が授与されました。

(工学研究科・工学部)



## 南谷英美さん「ロレアル - ユネスコ女性科学者日本奨励賞」受賞

工学研究科精密科学・応用物理学専攻（応用物理学コース）ナノ物性理論領域、大学院博士後期課程の南谷英美さんが、「2008 年度ロレアル - ユネスコ女性科学者日本奨励賞」を受賞しました。この賞は、パリに本社を置くロレアルグループと国連専門機関のユネスコが共同で推進するプロジェクトの一環で、世界の女性科学者の業績を称えとともに、同分野で活躍する女性たちの世界レベルでの更なる飛躍と地位向上を目的に、1998 年に創立されたものです。今回は、同プロジェクトの3つのカテゴリーのうち、若手女性科学者を一年間研究の継続ができるよう奨励し、助成する「ロレアル - ユネスコ国内賞：ロレアル - ユネスコ女性科学者 日本奨励賞（物理学分野）」を受賞しました。

南谷さんは、鉄などの磁性原子がもつ“スピン”が金属中の伝導電子によって遮蔽されるという近藤効果がナノ構造においてどのような影響を与えるかについて、理論的に研究しています。今回の受賞は、金属表面上の磁性原子対において、近藤効果とスピン間相互作用の競合を走査トンネル顕微鏡により実空間で観測する可能性があることを理論面から提案した独創性が、高く評価されたものです。

受賞式は、8月26日（火）、東京都内の日本工業会館で行われ、賞状及び奨学金が授与されました。

（工学研究科・工学部）



南谷さん（左から4番目）

## 新教授紹介

金 澤 忠 博 (かなざわ ただひろ)

大学院人間科学研究科



### 【略歴】

- 昭54. 3 信州大学人文学部卒業
- 54. 6 信州大学助手人文学部
- 55. 4 大阪大学人間科学部聴講生
- 56. 4 大阪大学大学院人間科学研究科聴講生
- 59. 3 大阪大学大学院人間科学研究科行動学専攻前期課程修了
- 平成. 3 大阪大学大学院人間科学研究科行動学専攻後期課程単位  
修得退学
- 元. 4 大阪大学人間科学部研究生
- 元. 7 大阪大学人間科学部文部技官
- 2. 6 大阪大学助手人間科学部
- 10.11 博士(人間科学)(大阪大学)
- 12. 4 梅花女子大学文学部助教授
- 16. 4 梅花女子大学現代人間学部教授
- 20.10 大阪大学教授大学院人間科学研究科

所 属：大学院人間科学研究科人間科学専攻行  
動生態学講座  
専門分野：人間行動学、発達心理学

高 島 庄太夫 (たかしま しょうだゆう)

大学院医学系研究科



### 【略歴】

- 昭54. 3 大阪大学医学部卒業
- 54. 7 大阪大学医学部附属病院臨床研修医
- 55. 7 和歌山県紀南総合病院医員
- 60. 7 大阪大学医学部附属病院医員
- 平成. 2.10 大阪大学助手医学部
- 5. 1 N T T西日本大阪病院放射線科医長
- 8. 4 大阪大学講師医学部
- 8. 6 信州大学助教授医学部附属病院
- 9.10 信州大学助教授医学部
- 16. 4 独立行政法人国立病院機構刀根山病院放射線科医長
- 19. 4 大阪府立成人病センター放射線診断科主任部長
- 20.10 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科保健学専攻医療技  
術科学分野機能診断科学講座  
専門分野：胸部画像診断・頭頸部画像診断

小比賀 聡 (おびか さとし)

大学院薬学研究科



### 【略歴】

- 平成. 2. 3 大阪大学薬学部製薬化学科卒業
- 4. 3 大阪大学大学院薬学研究科薬品化学専攻博士前期課程  
修了
- 4. 4 大阪大学助手薬学部
- 10. 2 博士(薬学)(大阪大学)
- 10. 4 大阪大学助手大学院薬学研究科
- 14. 5 米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校化学科客員  
研究員(平成15.3まで)
- 16.10 科学技術振興機構(JST)さきがけ研究員  
(兼任平成20.3まで)
- 18. 4 大阪大学助教授大学院薬学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院薬学研究科
- 20. 8 大阪大学教授大学院薬学研究科

所 属：大学院薬学研究科応用医療薬科学専攻  
生物有機化学分野  
専門分野：生物有機化学、核酸化学

## 新教授紹介

藤 岡 弘 道 (ふじおか ひろみち)

大学院薬学研究科



所 属：大学院薬学研究科分子薬科学専攻分子  
合成化学分野  
専門分野：有機合成化学、医薬品合成化学

### 【略歴】

- 昭50. 3 大阪大学薬学部製薬化学科卒業
- 52. 3 大阪大学大学院薬学研究科薬品化学専攻博士前期課程  
修了
- 56. 3 大阪大学大学院薬学研究科薬品化学専攻博士後期課程  
修了(薬学博士)
- 56. 4 米国ハーバード大学博士研究員
- 58. 4 大阪大学薬学部研究生
- 59. 4 大阪大学薬学部教務職員
- 60. 4 大阪大学助手薬学部
- 平 4. 8 大阪大学助教授薬学部
- 10. 4 大阪大学助教授大学院薬学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院薬学研究科
- 20. 8 大阪大学教授大学院薬学研究科

伊 東 忍 (いとうしのぶ)

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科生命先端工学専攻物  
質生命工学コース  
専門分野：生命機能化学

### 【略歴】

- 昭56. 3 大阪大学工学部石油化学科卒業
- 58. 3 大阪大学大学院工学研究科石油化学専攻博士前期課程  
修了
- 61. 3 大阪大学大学院工学研究科応用精密化学専攻博士後期  
課程修了
- 61. 3 博士(工学)(大阪大学)
- 61. 4 大阪大学助手工学部
- 62. 9 米国カリフォルニア大学サンディエゴ校化学科博士研  
究員(～昭63.8まで)
- 平 6. 6 大阪大学助教授工学部
- 10. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 11.10 大阪市立大学大学院理学研究科教授
- 20.10 大阪大学教授大学院工学研究科

實 野 孝 久 (じつの たかひさ)

レーザーエネルギー学研究センター



所 属：レーザーエネルギー学研究センター  
光・量子放射学研究部門  
専門分野：レーザー物理学、光学

### 【略歴】

- 昭46. 3 甲南大学理学部応用物理学科卒業
- 48. 3 甲南大学大学院自然科学研究科物理学専攻修士課程修了
- 48. 4 防衛庁技官職
- 53. 3 同上退職
- 56. 3 甲南大学大学院自然科学研究科物理学専攻博士課程修了
- 56. 4 学校法人甲南学園講師(非常勤)
- 57. 3 同上退職
- 57. 4 社団法人レーザー学会レーザー技術振興センター所員  
(研究員)
- 58. 7 同上退職
- 58. 7 大阪大学助手レーザー核融合研究センター
- 62. 2 大阪大学講師レーザー核融合研究センター
- 平 7. 7 大阪大学助教授レーザー核融合研究センター
- 16. 4 大阪大学助教授レーザーエネルギー学研究センター
- 19. 4 大阪大学准教授レーザーエネルギー学研究センター
- 20.10 大阪大学教授レーザーエネルギー学研究センター

## 坪村 宏名誉教授(基礎工学部)逝去



本学名誉教授坪村 宏先生は平成20年8月10日(日)、膵臓癌のため逝去されました。享年80歳でした。

先生は、昭和25年東京大学理学部化学科を卒業、東京工業大学大学院特別研究生を修了後、東京大学理工学研究所教務員、助手等を経て、昭和37年11月に大阪大学基礎工学部に教授として就任し、平成3年3月末の停年退官までの28年余りの期間、合成化学科有機材料化学講座を担当されました。また、基礎工学部附属太陽光エネルギー化学変換実験施設(現、太陽エネルギー化学研究センター)の設立に尽力され、設立(昭和56年)とともに、同施設長を併任されました。

研究においては、東京大学時代に、シカゴ大学R.S. マリケン教授(ノーベル化学賞受賞者)と、酸素分子と有機分子との電子的相互作用に関する研究を行われました。大阪

大学では、光によって励起された分子の物理的・化学的性質、および光化学反応の機構に関する研究を推進されました。その後、太陽エネルギーの化学的利用へと研究を展開され、その学術的基礎である半導体光電気化学の分野において、いくつもの先駆的な研究をされました。

教育にも熱心に取り組み、基礎工学部での授業をもとに、「新物理化学」等の教科書を著されました。また、「高校化学」の教科書の編修に携るとともに、理想的な高校教科書をめざして、「検定外高校化学」の出版もされました。

その他に、学内では、大学紛争の困難な時期に、学生生活委員会委員を務め、また、交通安全対策委員会豊中地区小委員長として、車両入講規制の実施実現に寄与されました。学外では、分子科学研究所創設にあたって運営委員会委員として、その創設と発展に尽力されました。また、日本太陽エネルギー学会関西支部長、資源エネルギー学会副会長、光化学協会理事等を歴任されたほか、第5回太陽エネルギー化学変換・貯蔵国際会議の組織委員長として、会議を成功に導かれました。

このように、先生は、時代を先導する形で、研究と教育を推進され、大阪大学ならびにわが国の学術発展のために、多大な貢献をされました。これらのご功績に対し、昭和46年に松永賞、昭和59年に日本化学会賞、平成5年に紫綬褒章、平成19年に日本太陽エネルギー学会功労賞が授与されています。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

## 内藤 高教授(文学部)逝去



文学研究科 内藤高教授は病氣療養中のところ、平成20年8月14日(木)脳梗塞のために逝去されました。誕生日を間近にした、享年58歳でした。

先生は1986年に東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。パリ第4大学博士学位取得。同志社大学専任講師、同助教授、同教授を経て、1996年10月大阪大学文学研究科比較文学講座の初代教授として着任されました。そして、専任教員一名という困難な中、フランス文学研究を基盤にした広範な学識に基づき、比較文学の領域を

せまく限定せずに、研究・教育に携わるとともに、多数の留学生を含め、多方面志向の学生・院生を受け入れてこられました。

比較文学講座は関西圏の国立大学では唯一のものであり、その使命は非常に大きいものでした。西洋文学が日本近代文学に与えた影響や日本近代文学が東アジアに与えた影響、あるいは日本文学と西洋文学・アジア文学との対比研究を中軸に、文学と絵画・音楽・映画などのジャンル間交渉といった間口の広い研究・教育は大阪大学の比較文学の特徴となってきました。ご研究の一端は、『明治の音 西洋人が聴いた近代日本』(中公文庫、2005年3月)に纏められました。

先生は温厚なお人柄である一方、学生・院生の指導に当たっては厳格な態度で臨まれました。同時に、ユーモアを解する精神は研究室の雰囲気をもたせ、一つにまとめることとなりました。てれ性でもあり、多くの学生たちに慕われるのも自然なことでした。

大阪大学の比較文学専門分野が日本における比較文学研究の大きな拠点になりつつある中での逝去は、まことに惜しまれるものです。

謹んで哀悼の意を表します。

(文学研究科・文学部)

## 工学研究科・工学部がラジオ番組を開始

工学研究科・工学部は、昨年度に引き続き、平成20年10月から平成21年3月までの半年間、高校生、受験生及び保護者を対象に、工学研究科・工学部の魅力をアピールするため、朝日放送ラジオ（1008kHz）にてラジオ番組「どんなんな？ 阪大工学部」を開始しました。

番組の内容は、工学研究科・工学部の教員による研究紹介のコーナーや、卒業生・在学生等が現在の活躍分野や将来の夢を語るコーナー、キャンパスライフなどを取材するコーナーなど、工学系学部への興味を引くものとなっており、工学系学部の志願者の増加につながることを期待しています。

初回の収録では、馬場章夫工学研究科長が出演し、「高校生の皆さんにアドバイスを」との要望に対し「高校生の皆さんは、いろいろなこと、いろいろな人に興味を持ってほしい。また、人の話を聞き、本を読むことが自分の力になる。」と答えるなど、受験生への応援メッセージを熱く語りかけました。



初回分の収録風景（右奥が馬場章夫工学研究科長）

番組名：どんなんな？ 阪大工学部

放送時間：毎週日曜日 21:30～22:00

放送期間：平成20年10月～平成21年3月

（工学研究科・工学部）

## 大阪大学総合学術博物館第3回特別展 「21世紀の薬箱 新しい医療文化の形成」

薬物療法は古今東西変わらない治療手段です。大阪大学の源流にあたる「適々斎塾」を主宰した蘭方医、緒方洪庵が愛用した薬箱が今も適塾に残されています。使用されていた薬は当時最先端の蘭方と漢方生薬・製剤で、その当時の新しい医療に対する洪庵の熱き思いと挑戦を雄弁に語っています。また、中国渡来の本草学を日本独自のものへと進化させる過程で、採薬を主とする物産学的研究を薬学者が担い、高品質の国内産薬物の開発や生産に貢献してきました。近世の物産会は知識の流布と技術向上を促進し、製薬業の萌芽へとつながります。さらに、21世紀を迎えた今、創薬をはじめとする医療科学を総合的かつ先端的手法により進展させることは、人類社会の共通の課題です。

本特別展では、新しい医療文化の形成の鍵となる「洪庵の薬箱」から、大阪大学の国際的な薬物探究の歴史をたどります。そして、21世紀の薬箱にふさわしい新たな薬物の探索・薬物治療の開発に関する最先端の研究を紹介します。



開催期間：10月31日（金）～12月20日（土）

開催場所：大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館

開館時間：10:00～16:30

入場無料 日・祝は休館。ただし、11月2日（日）3日（祝）は開館

主催：大阪大学総合学術博物館 共催：大阪大学大学院薬学研究科

協力：大阪大学21世紀懐徳堂、適塾記念会、くすりの道修町資料館、少彦名神社、乃村工芸社

総合学術博物館ホームページ <http://www.museum.osaka-u.ac.jp/>

問い合わせ先：大阪大学総合学術博物館 TEL: 06 - 6850 - 6284

（総合学術博物館）

## 第49回大阪大学まちかね祭

今年のテーマは「煌～きらめき～」

今年も大阪大学豊中キャンパスで、11月1日(土)～11月3日(月・祝)の3日間に渡り、『煌～きらめき～』をテーマに第49回大阪大学まちかね祭を開催します。

近年サークル活動などがますます活発になり、まちかね祭においても日頃のクラブ・サークル活動における成果の発表、あるいは野外ライブ、講演会、スポーツ大会、模擬店等様々な企画が行われ、本学学生のみならず学外からも多くの来訪者で賑わっています。

皆様のお越しをお待ちしております。

開催期間：11月1日(土)～11月3日(月・祝) 10:00～

開催場所：大阪大学豊中キャンパス(豊中市待兼山町)

アクセス：阪急電車宝塚線「石橋駅」下車、徒歩15分 大阪モノレール「柴原駅」下車、徒歩10分

主なイベント：LIVE IN HANDAI(3日 15:30～@ステージ奏) お笑いライブ(2日 13:00～@ステージ奏)

阪大 Before&After(3日 18:55～@ステージ奏) FINALE(3日 17:30～@ステージ奏)

詳しくは、まちかね祭ホームページ「MACHIKANE FESTIVAL 2008」(<http://www.machikanesai.com/>)でご確認下さい。

(大学祭中央実行委員会)

## 大阪大学室内楽アンサンブル第7回演奏会

大阪大学室内楽アンサンブル(OUCE)は、クラシック音楽の日常的な練習会および定期的な演奏会活動を通して、大阪大学の文化的基盤の醸成と大阪大学構成員間のコミュニケーション促進に微力を尽くすことを目的として、平成17年4月に設立されました。

このたび第7回演奏会を下記の通り開催いたしますので、皆様、お誘い合わせの上、ご来聴賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

詳しくは、OUCEのホームページ(<http://orchestra.musicinfo.co.jp/ouce/>)をご覧ください。

日時：11月2日(日) 開場：13:30 開演：14:00

場所：大阪大学コンベンションセンター MOホール 入場無料

(演奏曲目)

バッハ 音楽の捧げもの BWV1079 第1楽章 第2楽章

シューベルト 弦楽五重奏曲 八長調 D.956 第1楽章

ブラームス ホルン三重奏曲 変ホ長調 Op.40 第1楽章

カブレ 五重奏曲

フォーレ ピアノ三重奏曲 二短調 Op.120 第1楽章

ブラームス 弦楽六重奏曲第1番 変ロ長調 Op.18 第1楽章

シューベルト ピアノ五重奏曲 イ長調 D.667「鱒」 第1楽章

♪休憩時間中、ホールロビーにてリコーダー演奏を行います♪



(大阪大学室内楽アンサンブル)

## 大阪大学第2回男女共同参画シンポジウム 「ワーク・ライフ・バランスの実現を目指して」

多様な人材活用推進委員会と女性研究者キャリア・デザインラボの主催で、第2回男女共同参画シンポジウム「ワーク・ライフ・バランスの実現を目指して」を下記のとおり開催いたします。

日時：11月4日(火) 13:00～16:30

会場：大阪大学基礎工学部シグマホール(豊中キャンパス)

講演：坪田 秀子 氏(日本ロレアル(株)取締役副社長)

須田 勝也 氏(パナソニック(株)人事グループ・グループマネージャー)

青野 由利 氏(毎日新聞社論説委員)

脇坂 明 氏(学習院大学大学院経済学研究科教授)

主催：大阪大学多様な人材活用推進委員会 大阪大学女性研究者キャリア・デザインラボ

問い合わせ先：大阪大学女性研究者キャリア・デザインラボ

TEL: 06 - 6879 - 4405(ダイヤルイン) FAX: 06 - 6879 - 4406 E-mail: [kyariadl@ns.jim.osaka-u.ac.jp](mailto:kyariadl@ns.jim.osaka-u.ac.jp)

(多様な人材活用推進委員会)

平成20年度適塾記念講演会

大阪大学及び適塾記念会では、緒方洪庵及び門下生の業績を顕彰するとともに、事業の一つとして毎年記念講演会を開催し、大阪における新しい学術、文化の成果をお伝えしています。今年度も多数のご参加をお待ちしております。

日 時：11月26日（水）18：00～20：00

会 場：大阪大学中之島センター10階 佐治敬三メモリアルホール  
（大阪市北区中之島4-3-53 TEL 06-6444-2100）

主 催：大阪大学、適塾記念会

プログラム

講演1「イメージとしての“大大阪”——モダン都市はいかに語られようとしたか——」

大阪大学総合学術博物館教授 橋 爪 節 也

大阪は、イメージ優先で語られやすい都市である。80年前の大正14年、大阪市は周辺地域の編入で、東京市を抜いて日本第1位、公称世界第6位の規模のマンモス都市“おおさか大阪”となったが、この“大大阪”という言葉も、文化芸術の側面でみれば実態以上にスローガ的な意味で用いられることが多かった。近代大阪の特質を“大大阪”という言葉が喚起するイメージでたどることは、現代の大阪を考える上でも面白い問題を提起するのではなかろうか。

講演2「持続可能な都市像」大阪大学名誉教授 大久保 昌 一

本講では世界共通の都市目標というべきサステナブル・シティのコンセプトとそれへのアプローチを概観したい。わが国の近代都市政策が、スタート時点から最近まで、資本・生産の論理を重視し、人間・生活の論理を軽視してきたことを深く反省し、人間の心と生活を豊かにし、しかも人間中心主義から脱皮して共生主義に立つ、誰もが住みたくなるまち、持続可能な都市、個性豊かな都市づくりを志向しなければならない。

受講料：無料（定員190名）

お申込みはFAX・メール・お電話で受け付けております。

（FAX・メールによるお申込みは、お名前・ご住所・電話番号をご記入の上、下記宛にお送りください。）

問い合わせ先：大阪大学総務部評価・広報課広報・社会学連携事務局 TEL 06-6879-7151 FAX 06-6879-7156

E-mail soukousyagakurenkei@ns.jim.osaka-u.ac.jp

（総務部評価・広報課広報・社会学連携事務局）



第8回大阪大学フォーラム(サンフランシスコ)

本学では、研究者の優れた研究活動を広く海外に発信するため、毎年大阪大学フォーラムを開催しています。

第8回を迎える今年度は、本学サンフランシスコ教育研究センターの協力を得て、本学及びカリフォルニア工科大学（CIT）、マサチューセッツ工科大学（MIT）、カリフォルニア大学バークレー校（University of California, Berkeley）等の研究者が、地球環境エネルギー問題解決に向けた研究討議や講演、発表を行います。

開催期間：12月8日（月）～10日（水）

開催場所：Milton Marks Conference Center "Great Hall"（カリフォルニア州サンフランシスコ）

テーマ：Bio-Environmental Chemistry（生命環境化学）

開催内容：講演、ポスター展示

主催：大阪大学、グローバルCOEプログラム「生命環境化学グローバル教育研究拠点」

実行委員長：福住俊一（工学研究科教授・当該グローバルCOEプログラム拠点リーダー）

詳細はホームページ参照。http://www.gcoebec-osaka-u.jp/forum2008/index.html

問い合わせ先：国際部国際交流課国際交流推進係（内線9576）

（直通電話：06-6879-7163、E-mail: kokusai@hpc.cmc.osaka-u.ac.jp）

（国際部国際交流課）

## 平成20年度大阪大学大学院薬学研究科公開講座「くすり医療」

**目 的**：2006年度から薬学部6年制が導入され、薬剤師、薬学研究者の専門的かつ幅広い知識が益々必要とされています。本講座では、「くすり医療」をテーマに、基礎から臨床までの最新の知見をもとに、現在の課題と将来への展望について、それぞれ最先端の分野で活躍する研究者が講述します。

**日 時**：11月29日(土) 12月6日(土) 各日13:00～17:50

**会 場**：大阪大学コンベンションセンター1階研修室 (<http://www.handai-kouenkai.org/convention/index.html>)

**主 催**：大阪大学大学院薬学研究科

### ●演題及び講師●

#### 11月29日(土)

13:00～14:30 『和漢薬の多様性：品質と作用』  
大阪大学総合学術博物館・准教授 高橋京子

14:40～16:10 『薬食同源 - 食物にクスリのルーツを探る - 』  
京都薬科大学・教授 吉川雅之

16:20～17:50 『健康食品の有効利用と健康被害の回避に向けて  
- エビデンスと制度によって作用の有効性と安全性は確保されるのか? - 』  
神戸学院大学薬学部・教授 徳山尚吾

#### 12月6日(土)

13:00～14:30 『遺伝子導入技術開発の生命科学研究への貢献』  
医薬基盤研究所・プロジェクトリーダー 水口裕之

14:40～16:10 『C型肝炎に対する抗ウイルス治療』  
大阪大学大学院医学系研究科・准教授 竹原徹郎

16:20～17:50 『生体バリアを利用した創薬研究の新潮流』  
大阪大学大学院薬学研究科・准教授 近藤昌夫

**定 員**：80名(先着順)

**対 象 者**：本講座は大阪大学に限らず広く薬学部卒業生、薬剤師(開局、勤務を問わない)、製薬企業勤務者等、薬に関する基礎知識を有する方が対象ですが、一般の方でも本講座に関心のある方の参加を歓迎します。

なお、本講座は日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師制度対象講座及び大阪府病院薬剤師会(OHP)生涯研修制度認定対象講座です。

**受 講 料**：6,200円(申込後は受講料の返還はできません。)

**申 込 期 間**：10月14日(火)～11月13日(木)

**問い合わせ先**：大阪大学薬学研究科庶務係 ☎565-0871 大阪府吹田市山田丘1-6 TEL 06-6879-8144(直通)  
(薬学研究科・薬学部)

## 人権問題に関する講演会

人権問題に関する啓発行事として、12月の人権週間にあわせて、人権問題に関する認識と理解を深めるため、講演会を開催しています。

今年度は、人権デーの日に幅広く人権問題をテーマとして、以下のとおり開催することとなりました。

教職員・学生及び近隣地域の方々の積極的な参加をお待ちしています。

**日 時**：12月10日(水) 15:30～17:00

**会 場**：人間科学研究科 第51講義室(本館5階)

**講 師**：細見 和之(大阪府立大学人間社会学部准教授)

**演 題**：「歌に託された暴力の記憶」

**問い合わせ先**：総務部総務課総務係(06-6879-7014)

(総務部総務課)

## 競争的資金等の不正使用防止への取り組み

大学における科学研究は、国民の信頼とそれに基づいた国民の負託によって支えられています。とりわけ、公的研究費の不正使用は、その信頼と負託を大きく損なうものであり、それを起こした研究者が所属する機関ばかりでなく、我が国の科学技術振興体制を根底から揺るがしめるものです。

近年の研究費の不正使用問題を契機として、文部科学省では、平成19年2月に「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」を策定し、このガイドラインに基づく体制の整備を各研究機関に求めています。

本学では、昨年11月に「国立大学法人大阪大学における競争的資金等の取扱いに関する規程」<sup>(注)</sup>の制定など体制の整備に努めています。

(注) <http://kenkyo.jim.osaka-u.ac.jp/07fuseiboushi/kitei.pdf> 参照

このたび、その取り組みとして「国立大学法人大阪大学における競争的資金等の使用に関する行動規範」及び「国立大学法人大阪大学競争的資金等不正防止計画」をいずれも9月16日に策定しました。

行動規範は、大学の学術研究業務に対する国民の信頼を確保するため、研究等を遂行する上で、本学の研究者等として守るべき行動の基準を取り組みの指針として定めたものです。

一方、不正防止計画は、不正が発生する要因がどこにどのような形であるのかを、過去の不正事例や他機関の事例等を参考にしながら要因の洗い出しを行い、それに対応した具体的な不正防止計画を策定したものです。

また、本学では上記の規程施行後約1年を迎えようとしていますが、教職員を対象とした競争的資金等の管理に関するルールの認知・理解等についての意識調査や競争的資金等の使用ルールに関したハンドブックの作成を行うなど、本学教職員の不正使用防止の取り組みの理解増進と問題意識の向上を図ることにより、今後とも本学における不正使用防止への取り組みを一層進めていきたいと考えております。

教職員の皆様におかれましては、行動規範に盛り込まれている事項を遵守していただくとともに、競争的資金等の適正な執行、管理に引き続きお取り組みいただきますようよろしくお願いいたします。

本学の「競争的資金等の不正使用防止への取り組み」については、大阪大学ホームページ (<http://www.osaka-u.ac.jp/>) > 教育・研究活動 > 競争的資金等の不正使用防止への取り組み (<http://kenkyo.jim.osaka-u.ac.jp/07fuseiboushi/index.html>) をご覧ください。

### 国立大学法人大阪大学における競争的資金等の使用に関する行動規範

(平成20年9月16日)

大学における科学研究は、国民の信頼とそれに基づいた国民からの負託によって支えられている。とりわけ、競争的資金等<sup>(注)</sup>の不正使用は、その信頼と負託を大きく損なうものであり、それを起こした研究者が所属する機関ばかりではなく、我が国の科学技術振興体制を根底から揺るがすものである。

このことを踏まえ、国立大学法人大阪大学(以下「本学」という。)は、公的性格を有する学術研究の信頼性と公正性を担保し、大学の学術研究業務に対する国民の信頼を確保するため、研究等を遂行する上での行動(態度)の基準を行動規範として次のとおり定める。

本学の研究者及び事務職員等(以下「研究者等」という。)は、これを誠実に実行しなければならない。

1. 研究者等は、競争的資金等が大学の管理する公的な資金であることを認識し、公正かつ効率的に使用しなければならない。
2. 研究者等は、競争的資金等の使用に当たり、関係する法令・通知及び本学が定める規程等、並びに事務処理手続き及び使用ルールを遵守しなければならない。
3. 研究者等は、研究計画に基づき、競争的資金等の計画的かつ適正な使用に努めなければならない。また、事務職員は、研究活動の特性を理解し、効率的かつ適正な事務処理を行わなければならない。
4. 研究者等は、相互の理解と緊密な連携を図り、協力して競争的資金等の不正使用を未然に防止するよう努めなければならない。
5. 研究者等は、競争的資金等の使用に当たり取引業者との関係において国民の疑惑や不信を招くことのないよう公正に行動しなければならない。
6. 研究者等は、競争的資金等の取扱いに関する研修等に積極的に参加し、関係法令等の知識習得、事務処理手続き及び使用ルールの理解に努めなければならない。

(注) 競争的資金等とは、研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)(平成19年2月15日文部科学大臣決定)の別紙並びに科学研究費補助金取扱規程第4条第2項の特定給付金等を定める件(平成16年8月24日文部科学大臣決定)第1条第1項及び第2項の各号に掲げるものをいう。

## 国立大学法人大阪大学競争的資金等不正防止計画

(平成20年9月16日)

国立大学法人大阪大学における競争的資金等<sup>(注)</sup>の取扱いに関する規程(以下「取扱規程」という。)第15条により、研究費の適正な運営・管理を行うため、不正防止計画を以下のとおり定める。

### 【不正発生の要因と防止計画】

| 不正発生の要因                                                         | 防 止 計 画                                                                                                                                                                             |
|-----------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>責任体系の明確化</b>                                                 |                                                                                                                                                                                     |
| ・競争的資金等責任者の責任と権限に対する意識が明確でない。                                   | 取扱規程等により責任体系を整備し、ホームページ等で周知しているが、今後は説明会や研修会等を実施することにより、更なる周知の徹底及び意識の向上を図る。                                                                                                          |
| ・時間の経過による責任意識の低下                                                | 部局長会議等において、随時、各責任者に対し責任体系の啓発を促し、意識の向上を図る。また、各責任者の異動にあつては、引継ぎ等を明確に行い、責任意識の低下を防止する。                                                                                                   |
| <b>適正な運営・管理の基礎となる環境整備</b>                                       |                                                                                                                                                                                     |
| ・競争的資金等の使用ルールが理解されていない。                                         | 使用ルールを盛り込んだハンドブックを配付することにより適正運用の徹底を図る。                                                                                                                                              |
| ・コンプライアンスに対する関係者の意識が希薄である。                                      | 行動規範を制定し、ホームページ等で周知・公表する。また、研修会・説明会等を実施して研究者及び事務職員等のコンプライアンス意識の向上を促す。                                                                                                               |
| <b>研究費の適正な運営・管理活動</b>                                           |                                                                                                                                                                                     |
| ・予算執行状況が適切に把握されていないため、年度末に予算執行が集中する等の事態が発生する。                   | 研究計画に基づき、定期的に予算執行状況の確認を行うとともに、必要に応じ改善を求める。                                                                                                                                          |
| ・発注段階での財源特定がなされていない。                                            | 競争的資金等の執行状況を的確に把握するため、発注段階での財源特定を徹底するよう、通知等により指導・注意喚起を行う。                                                                                                                           |
| ・研究者の発注することのできる範囲が守られていない。                                      | 会計規程等を遵守させるとともに、説明会・研修会等により、周知・徹底を図る。                                                                                                                                               |
| ・取引業者が研究者と必要以上に密接な関係を持つことが癒着を生み、不正な取引に発展する。                     | 特定の業者との密な取引がないか注視するため、必要に応じて債務確認をするなど取引状況の確認を行う。<br>また、不正な取引を行った業者については、本学における「物品購入等契約に係る取引停止等の取扱基準」に基づき取引停止等の措置を講ずることにより他の業者へ注意の喚起を行う。                                             |
| ・発注者(研究者)自身が、納品・検収確認を行うことがある。                                   | 研究者が契約を行い、かつ、研究者本人が検収行為を行う場合は、他の検査職員による納品事実の確認を受けることを徹底する。また、事務職員も随時モニタリング等によりその状況を検証する。                                                                                            |
| ・非常勤職員(短期雇用者)の雇用依頼者以外の者による勤務確認がなされていない。                         | 事務職員または、雇用依頼者以外の教員等が勤務状況等を確認することを説明会や研修会等を通じて徹底する。                                                                                                                                  |
| ・研究者等の出張計画の実行状況の把握ができていない。                                      | 部局責任者は、事前に出張の必要性を確認するものとし、旅行後はその実行状況について報告させる等によってモニタリングを行い、取扱規程等の違反がないように徹底する。                                                                                                     |
| <b>情報の伝達を確保する体制の確立</b>                                          |                                                                                                                                                                                     |
| ・使用ルール等の統一が図られていないため、誤った解釈で経費が執行されるおそれがある。                      | 事務局及び各部局に設置した相談窓口において研究者等からの相談や質問を受け付ける。<br>また、受け付けた質問等を取りまとめたQ&A集等を作成し、ホームページ等により周知することにより、経費のより適正な執行を図る。                                                                          |
| ・通報窓口が判りにくいため、不正が潜在化する。                                         | 通報窓口は、ホームページ等により周知しているが、さらに通知やハンドブックなどにより通報窓口の存在を周知・徹底する。                                                                                                                           |
| <b>モニタリングの充実</b>                                                |                                                                                                                                                                                     |
| ・不正使用の防止を推進する体制の検証及び不正使用発生要因に着目したモニタリングが不十分であるため、不正発生のリスクが存在する。 | リスクマネジメントとして、本学全体の視点から実効性のあるモニタリング体制を整備することにより、不正発生要因を把握する。<br>そのため、監査室は、不正使用防止計画推進室と連携してモニタリング及び内部監査を実施するとともに、不正使用防止体制の検証を行い、リスクの除去・低減を図る。<br>併せて、行動規範や使用ルールの周知徹底ならびにその理解度の把握に努める。 |

### 【不正防止計画の点検・評価】

- ・競争的資金等に係る不正を発生させる要因の把握に努め、不正防止計画について点検・評価を行い、その見直しを図る。

(注) 競争的資金等とは、研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)(平成19年2月15日文科科学大臣決定)の別紙並びに科学研究費補助金取扱規程第4条第2項の特定給付金等を定める件(平成16年8月24日文科科学大臣決定)第1条第1項及び第2項の各号に掲げるものをいう。

(不正使用防止計画推進室)

## 平成19年度及び平成20年度入構・駐車整理業務収支決算

平成19年度の入構・駐車整理業務に係る収支決算について、監査を受け、施設マネジメント委員会に報告し承認されました。なお、差引残高については大学内の交通安全対策経費への寄附金として処理されました。

また、平成20年度から入構・駐車整理業務を大学が直接行うこととなりましたが、平成20年3月に事前申請された平成20年度の入構・駐車許可に係る収入金については、大阪大学構内交通規制会の平成20年度経費として取り扱ったため、これに係る収支決算についても同様に監査を受け、同委員会に報告し承認されました。

なお、これをもって大阪大学構内交通規制会は廃止されました。

平成19年度

単位：円

| 収 入                       | 支 出                     |
|---------------------------|-------------------------|
| 前年度繰越高<br>小 計 25,545,335  | 業務委託料<br>小 計 88,005,563 |
| 当期の収入<br>事前申請分 92,045,000 | 物件費<br>消耗品費 258,111     |
| 当日申請分 25,970,550          | 修繕費 44,100              |
| 預金利息 129,056              | 印刷製本費 2,310,645         |
| 雑収入 0                     | 小 計 2,612,856           |
| 小 計 118,144,606           | 雑費<br>寄附金 25,545,335    |
|                           | 料金返却料 1,345,500         |
|                           | 振込手数料 173,040           |
|                           | 雑費 81,400               |
|                           | 小 計 27,145,275          |
| 合 計 143,689,941           | 合 計 117,763,694         |
|                           | 収支差引 25,926,247         |

平成20年度

単位：円

| 収 入                       | 支 出                  |
|---------------------------|----------------------|
| 当期の収入<br>事前申請分 64,633,400 | 雑費<br>寄附金 64,419,708 |
| 預金利息 65,828               | 料金返却料 258,100        |
| 雑収入 0                     | 振込手数料 21,420         |
| 小 計 64,699,228            | 雑費 0                 |
| 合 計 64,699,228            | 小 計 64,699,228       |
|                           | 合 計 64,699,228       |
|                           | 収支差引 0               |

(総務部総務課)

## ガイドマップ

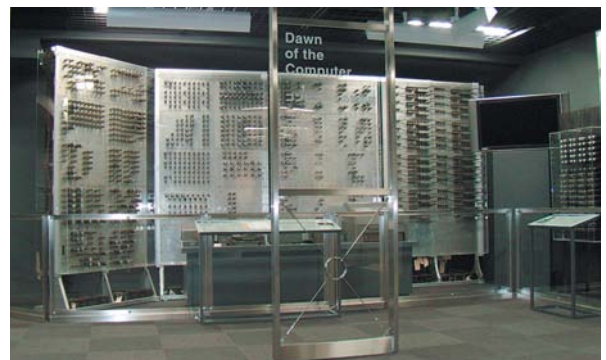
### 大阪大学真空管式計算機が「重要科学技術史資料」に登録

国立科学博物館は、貴重な科学技術史資料の保存と活用を図り、次世代に継承していくことを目的として、重要科学技術史資料（愛称：未来技術遺産）の登録制度を始め、このたび、その第1回目として23件を登録しました。その中に、大阪大学総合学術博物館所有の、1950年代に本学工学部の城 健三教授らによって開発された「大阪大学真空管式計算機 一式（ENIAC型10進演算装置及び本体）」も選ばれています。

登録証の授与式が10月9日(木)に東京上野の国立科学博物館においておこなわれ、本学からは江口太郎総合学術博物館長と廣川和花助教が出席しました。



授与式で登録証を受け取る江口館長



大阪大学真空管式計算機



登録証

## グローニンゲン教育研究センターの活動について

国際部国際連携課海外拠点支援係主任  
(グローニンゲン教育研究センター副センター長)

鐘ヶ江 勤

はじめまして。昨年4月より大阪大学海外3拠点(アメリカ・オランダ・タイ)の一つ、グローニンゲン教育研究センター(オランダ)で勤務しております鐘ヶ江と申します。センターの仕事内容について具体的に紹介できる機会はなかなかありませんので、日常の業務について、また今年度これまでにに行った活動について、少しでも紹介させていただければと思います。

### ■ グローニンゲン教育研究センターの業務について

本センターはグローニンゲン大学のゼルニケ・キャンパス内に位置し、事務所には藤原守センター長と鐘ヶ江(著者)の2名が勤務しています。仕事内容は、主に大阪大学とヨーロッパの大学の交換留学の促進・研究活動の支援等の活動を行う他、総務的・会計的な仕事(事務所のリース契約・保険の契約、個人所得税・社会保険料のオランダ税務署への支払い等)も行います。二人だけですべての仕事を行うのは大変ですが、大阪大学本部の方やグローニンゲ



グローニンゲン教育センター外観



左が藤原守センター長、右が著者

ン大学の方にサポートしていただきながら、日々どうにか仕事をこなしています。

### ■ グローニンゲン大学との協力関係について

本センターがグローニンゲン大学内のキャンパス内に設置されていることから分かるように、本センターの設置から日常の業務に至るまで、グローニンゲン大学にはいろいろとバックアップしていただきました。また、グローニンゲン大学と共同でイベントを実施することも多いため、グローニンゲン大学の、特に国際交流部の方々にはいつも大変お世話になっています。



グローニンゲン大学国際交流部の方々と

グローニンゲン大学国際交流部の担当者は、アジア担当・中南米担当のように、各個人別に担当のエリアを持っていることが多く、かつ日本の事務職員に比べて異動も少ないので、担当エリアについて非常に幅広い知識と経験を持っています。

また、仕事に対する責任感・発想の豊かさ・プレゼンテーション能力等、その他にも同じ事務職員として学ぶべきものが多々あります。

このように他国の事務職員と一緒に働く機会が得られることも、グローニンゲン教育研究センターで仕事をする醍醐味ではないかと思います。

### ■ 今年度ここまでの活動について

本センターはヨーロッパ拠点であるため、オランダは言うに及ばず、ヨーロッパ全土で積極的に活動を展開したいと考えております。

そこで、今年度に入ってから活動内容を少し紹介させていただきます。

## ■ ハノーバー・メッセ（ドイツ産業見本市）に参加（ハノーバー・ドイツ） （2008年4月21日～25日）

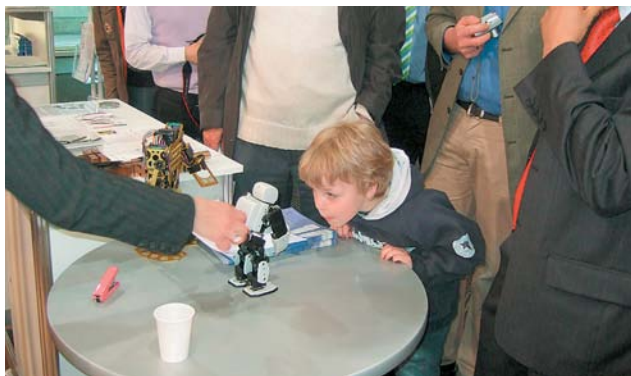
ヨーロッパで仕事をしていて強く感じることは、ヨーロッパでは我々が思っている以上に大阪、或いは日本に対する知識が少ないことです。つまり、大阪大学をアピールするためには、まず大阪、あるいは日本そのものをアピールする必要があります。本学は大阪市と包括協定を結んだ関係もあり、今年4月にドイツ・ハノーバーで開催されたハノーバー・メッセに大阪市とともに参加しました。隣のブースでは大阪府もブースを構えており、大阪府ロッテルダム事務所・大阪市パリ事務所・大阪大学グローニンゲン教育研究センターの大阪の在欧3機関がタッグを組んで“大阪”を強くアピールしました。



大阪市・大阪府ブース全員で記念写真

大阪市・大阪府ブースは大盛況で、持参した大阪大学の配布資料も足りないくらいでした。

当日は大阪大学からの出展物だけでなく、大阪市・大阪府の企業の出展物（小型ロボット、溶接器具等）も紹介する必要があり、普段馴染みのないものを英語で紹介するのはなかなか骨が折れましたが、いい勉強になりました。また、民間企業の方と一緒に働くことにより、大学にはない民間企業のサービス精神も学ぶことができたと思います。



システック・アカザワの小型ロボットを紹介

## ■ EAIE 総会への参加（アントワープ・ベルギー） （2008年9月10日～13日）

ヨーロッパを中心として、世界中から高等教育関係者が一堂に集まるイベント、EAIE（European Association for International Education）総会に参加してきました。会期中は総会が開催される他、セミナー・セッション・ワークショップに参加することで、ヨーロッパの高等教育に関する知識を深めることができるとともに、会期中、参加者名簿をもとにして、興味がある教育機関の担当者とコンタクトを取って、人的ネットワークを広げることもできます。私もセミナー・セッション・ワークショップに参加するとともに、時間の許す限り多くの人とアポイントを取り、人的ネットワークを広げることに努めました。

ヨーロッパの高等教育の現況についてはホームページ等でも知ることができますが、各国の担当者が、日常どのような問題に直面し、どのように自分なりの解決策を導き出しているかについては、こうしたイベントを通じて担当者と直に話してみなければ分からないことも多いと思います。私にとってはグローニンゲン大学の方以外とヨーロッパの高等教育について語るような機会はほとんどなかったため、各国からの参加者と広範囲にわたる議論ができたこのイベントは非常にいい経験となりました。



ワークショップ: Developing intercultural skills via international placements

## ■ 今後の活動について

ヨーロッパ全体が守備範囲と言えども、なかなかオランダ国内、又は近隣諸国以外には行くことができないのが現状です。それでも、予算と時間が許す限りいろんな場所に積極的に出かけ、大阪大学を広くアピールしていきたいと考えております。

本センターにアドバイス・ご質問等がありましたら、[info@osaka-u-groningen.org](mailto:info@osaka-u-groningen.org) までお気軽にメールをいただければと思います。

また、グローニンゲンにお越しの際は、ぜひ大阪大学グローニンゲンセンターにお越しいただければと思います。

### かねがえ・つとむ

国際部国際連携課主任

職歴:平成11年大阪大学経済学部教務掛採用後、平成13年8月(旧)大阪外国語大学入試課入学試験係に異動、平成16年8月大阪大学生命機能研究科大学院掛を経て、平成19年4月より大阪大学研究推進・国際部国際交流課海外拠点支援係へ異動後、オランダへ派遣。(平成19年10月より国際部国際連携課海外拠点支援係)

### プロフィール

## エアランゲン大学(ドイツ)

(Friedrich-Alexander Universität Erlangen-Nürnberg)

Friedrich-Alexander-Universität  
Erlangen-Nürnberg



エアランゲン大学（正式名称：Friedrich-Alexander Universität Erlangen-Nürnberg）は、1743年に設立され、バイエルン州第二の規模を持つ州立大学です。本部はエアランゲンに所在し、11学部のうち9学部がエアランゲンに、2学部はニュルンベルクにあります。教職員は、総数で10,000名以上に及び、近在の専門の単科大学や各大学とも緊密な連携を持ち、バイエルン州北部では突出した地位を占めています。エアハルト元西ドイツ首相もこの大学の卒業生です。

エアランゲン大学のモットーは“integrated diversity”です。神学部、法学部、医学部、哲学部（哲学、史学、社会科学）哲学部（言語学、文学）自然科学部（数学、物理学）自然科学部（生物学、化学、薬学）自然科学部（地理学、地質学）経済社会科学部、工学部、教育学部における様々な研究教育を基盤として、学際的な研究を推進し、革新的な研究成果を生みだしています。

国際交流にも力を入れており、500を超える世界の大学と交流を行っており、総学生数24,600名のうち約2,500名は海外からの留学生です。

大阪大学は、エアランゲン大学とのこれまでの交流実績を踏まえ、本年8月20日に大学間学術交流協定を締結しました。大阪大学で行われた調印式の模様は、25ページをご覧ください。

ホームページ：<http://www.uni-erlangen.de/>



### 編集後記

大阪大学と大阪外国語大学が統合し、新生大阪大学となって1年が経ちました。本号のクローズアップでは、統合により誕生した阪大で一番新しい学部であると同時に、大阪外大からの長き歴史を持つ学部でもある外国語学部をご紹介します。箕面キャンパスという新たなキャンパスにあるため、豊中・吹田キャンパスの皆さんにはまだまだ馴染みが薄いかもしれませんが、「世界に伸びる」大阪大学の重要な機能を果たす新たな力であることを感じていただければと思います。

キャンパス内の木々も徐々に色づき始め、秋も深まりを見せてきました。豊中キャンパスで行われる大学祭「まちかね祭」や総合学術博物館での特別展など、11月には毎年恒例の秋のイベントもいろいろと行われます。本号インフォメーションにてご紹介していますので、イベントに参加がてら秋の休日を阪大のキャンパスで過ごしてみたいかでしょうか。

（瀬尾）

## 舞踏研究会

【汗と涙と情熱と～競技ダンスが織り成す青春～】

皆さんは「社交ダンス」というものをご存知ですか？芸能人社交ダンス部や映画で有名になったあのダンスです。それに競技性を増して、日々培った技を競い合う競技会へ参加し、そこでの勝利を目指すというのが「競技ダンス」です。この競技ダンスに特化して活動しているのが、私たち舞踏研究会です。

社交ダンスには大きく分けて2種類あります。まず「正統派舞踏」というイメージのモダン。モダンはワルツなどの優雅なダンスが中心です。次に「情熱的で激しいダンス」というイメージのラテン。ラテンはチャチャ・サンバなどの勢いがある格好良いダンスが中心です。2種類計8種目ありますが、どの種目も万遍なく練習しています。

そして、競技会は大体月に1試合あります。常に目標を持つことが出来るので毎日がとても有意義です。そして私



たちは今期の試合でなんと総合優勝4冠を達成しているのです！今は夏の強化練習会と合宿を終え、秋シーズン勝利へ向けての気合も十分。私たち自身、更なる活躍の予感を感じています！

と、このようにアツい団体ですが、アツいのはダンスだけではなく。部員は皆とても明るく面白く変な人たちばかり。(笑)特にイベントや笑いへのアツさは半端なく、皆日々身体を張って笑いを追及しているんです。お陰で、落ち込んでいる時でも、練習場へ行って仲間と大笑いしている内にすっかり忘れて元気！なんて事もよくあります。明るく楽しく、でもやる時はやる！これが私たち舞踏研究会が誇る、最も素敵な spirit だと思っています。

主将 友草裕貴(基4年)

コメント  
「一緒にダンスを楽しみましょう！」



練習場所：豊中キャンパス学生会館 NO.9or 大手前大学

練習日時：月金の放課後、全体での練習会があります。その他の日にも自由練習が出来ます。放課後のNO.9はいつも部員で溢れており、ダンスミュージックとにぎやかな笑い声に包まれています。

部員数：今年は総勢80名近く！男女比はほぼ1:1です。

連絡先：主将 友草裕貴

get-a-ray-of-sunshine@docomo.ne.jp

# 歯学部附属病院を「ミッキー・ミニー」が訪問

8月27日(水)に東京ディズニーリゾート・アンバサダー(親善大使)がミッキーとミニーを伴い、入院中の子どもたちに「夢」と「勇氣」と「希望」をプレゼントするため歯学部附属病院を訪問しました。

この企画は、重度障害や病氣療養などの事情から東京ディズニーリゾートへ来訪できない子どもたちのために1日でも早く健やかな生活を迎えられるようにと東京ディズニーリゾートが福祉活動の一環として児童福祉施設や病院などで実施しているものです。

イベントを楽しみに集まった入院している子どもたちが、アンバサダーの小川りささんと一緒に「ミッキー！ミニー！」と大きな掛け声をかけると、♪ミッキーマウス・マーチ♪が会場に流れ、ミッキー、ミニーが登場、今回会場となった弓倉記念ホール(歯学研究科F棟5階)が夢の世界、魔法の国となりました。

ミッキーとミニーは、♪イツ・ア・スモールワールド♪でダンスを披露し、子どもたちも曲にあわせて手拍子楽しそうにリズムをとっていました。ダンスの後には、ミッキー、ミニーが、きらきらと目を輝かせて大喜びしている子どもたちひとりひとりとグリーティング(握手やハグ、写真撮影)をおこない、最後に子どもたち

はミッキー、ミニーとの別れを惜しみつつ力いっぱい手を振った後、「すごく楽しかった！」「ミッキーとミニーに会えてよかった！」「元気ができました！」等、顔を紅潮させて感激の気持ちを口にしていました。

また、アンバサダーとミッキー、ミニーは、病室で療養している子どもたちのベッドサイドも訪れ、手を握りながら力いっぱい励ましのメッセージを伝えました。

(歯学部附属病院)



阪大 NOW No.106 2008 10月号 2008年10月20日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課広報・社会学連携事務室 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1  
TEL: 06(6879)7017 FAX: 06(6879)7156  
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。  
E-mail: [soukousyagakukouhou@ns.jim.osaka-u.ac.jp](mailto:soukousyagakukouhou@ns.jim.osaka-u.ac.jp)